国分築地一号墳

——一宮町群集墳の調査——

1974

山梨県教育委員会
山梨県遺跡調査団

国分築地一号墳

――一宮町群集墳の調査――

1974

山梨県教育委員会

山梨県遺跡調査団

序

甲府盆地東部及び南部は，御坂山系から流出する河川によって形成された大きな扇状地と，曽根丘陵が連なっている。

ここは肥沃な土地で，東部は果樹，南部は桑園が多く，純農業地帯であるが，横断幹線道路がないことが農業振興の隘路になっている。昭和45年度から，金川曽根地区広域営農団地農道整備事業計画の一環として大規模農道建設が着工され，これに伴って既に数カ所の遺跡発掘調査が行なわれた。

これは金川右岸にある群集墳を調査した報告書である。この内の一古墳を緊急発掘調査するために群集墳の全貌もあわせて調査し，この中で発掘調査した古墳が占める位置を明らかにしようとしたものである。

炎天下発掘に従事して下さった山梨大学考古学研究会を初め多くの関係者に紙上で深甚なる謝意を表する次第である。

昭和49年 3 月31日

山梨県教育委員会

教育長　清水林邑

例　　言

1　本書は，一宮町に存在する国分群集墳の分布調査及び発掘調査を行った築地一号墳の調査報告書である。

1　本遺跡の発掘調査は，大型農道建設に伴い，山梨県教育委員会から山梨県遺跡調査団に委託され，同常任幹事野沢昌康が担当した。調査を進めるにあたっては，山梨大学考古学研究会の諸君のお力をお借りした。記して謝意を表する。

1　整理，報告等は，発掘にあたった山梨大学考古学研究会の諸君が行なった。報文の末尾にその文責を記した。

1　本書の編集は，同研究会員志村美千子，渡辺孝子が担当した。

1　写真撮影は同研究会員安部真一が担当した。

目　　次

序

例　　言

序　　論

第 1 章　遺跡の概観……1

第 2 章　発掘調査の経過……2

第 3 章　遺　　構……6

第 4 章　出土遺物……11

第 5 章　周辺の古墳……17

第 6 章　考　　察……26

参考資料

むすび

挿 図 目 次

第 1 図　遺 跡 遠 景

第 2 図　遺跡付近地形図

第 3 図　周 囲 の 地 形……3～4

第 4 図　発 掘 前 の 状 況…… 5

第 5 図　石室内小礫層平面図…… 6

第 6 図　石室内小礫層断面図…… 7

第 7 図　トレンチ全体図…… 8

第 8 図　一号墳土層図…… 9～10

第 9 図　石室内遺物出土状況……14

第 10 図　鉄製品実測図……16

第 11 図　古墳分布図 (1)……18

第 12 図　古墳分布図 (2)……25

第 13 図　参考資料　石船神社神体……30

図 版 目 次

図 版 1　（1） 発　掘　前……35

（2） 1 号 墳 石 室……35

図 版 2　須恵器および土師器……37

図 版 3　須　恵　器……37

図 版 4　（1） 金環および丸玉出土状況……39

（2） 金環および鉄器出土状況……39

図 版 5　装　身　具……41

図 版 6　鉄　製　品……43

図 版 7　石 室 平 面 図……45

図 版 8　石 室 展 開 図……47

図 版 9　石室横断図及び縦断図……49

図 版 10　出土遺物実測図……51

図 版 11　出土遺物実測図……53

図 版 12　装 身 具 実 測 図……55

第1図　遺　跡　遠　景

序　　論

甲府盆地東南部一宮町には，多くの古墳が群在している。その数は，いつしかと消滅していったものを含めるならば相当数にのぼるであろう。それにもかかわらず，この古墳群の実態は完全に調査されないまま今日に至っている。これら古墳群は比較的小規模のため，常に破壊の危険にさらされており，そのため実態を正確に把握し記録を行なうことがまず急務であろう。

古墳の研究は，その発生期においても多くの問題をかかえているが，終末期においてもその様相は今だに明らかになっていない。この現状からすればわずか一基の古墳の調査からはまだまだ古墳時代のこの大きな問題を解くわけにはいかないであろうが，少なくとも本県における古墳研究に一助をなすことは事実であろう。

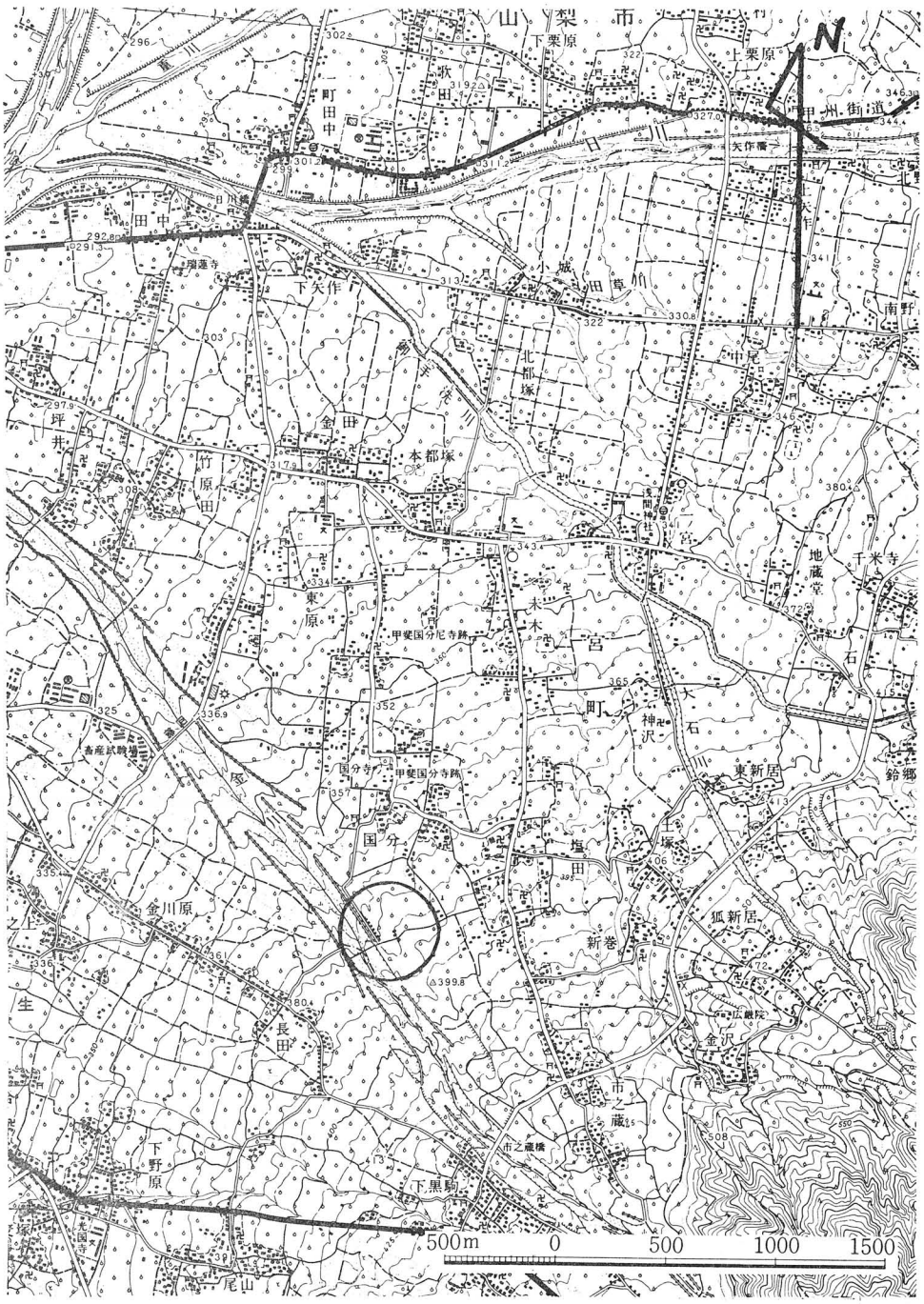
今回の調査は築地一号墳のみにとどまらず，一宮町周辺の群集墳を広範に含めながら，その実態を把握し，形態を明らかにし，さらにはそれらを一つの手がかりとして古墳終末期の解明にふみ出していくことを究極の目的としている。その意味から，今回の調査はその一環としてとらえるものであり，今後この課題に対しての研究は長く続いていくものである。

調査を一応終り，報告するにあたってこの課題解明に若干でも光を投げかけたであろうか，疑問も残るが，今後も調査を進めるなかで徐々に明らかにしていきたい。

調査を進められた山梨大学の考古学研究会の諸君はそのテーマを古墳文化研究に設定している関係上，発掘調査，整理，報告等，中心になってご苦労いただいた。また，土地の所有者であった水上和明氏，町文化財審議員鈴木高徳氏，町教育委員会石原弥須夫氏にはいろいろ御援助，御協力いただいた。末筆ながら深甚なる感謝の意を表したい。

さらに，調査を進める段階から報告書作成まで県文化財主事森和敏氏，ならびに遺跡調査員萩原三雄氏には数々の御指導，御教示をいただいた。あわせてお礼申し上げる次第である。

野　沢　昌　康


山梨市
下栗原
上栗原
N
甲州街道
矢作橋
町田中
日川
田中
下矢作
小城
田草川
南野
中尾
北都塚
金田
本都塚
坪井
竹原田
地蔵堂
千米寺
東原
甲斐国分尼寺跡
宮
町
大石
神沢
東新居
国分寺
甲斐国分寺跡
国分
塩田
上塚
金川原
狐新居
新巻
長田
広厳院
金沢
市之蔵
市之蔵橋
下野原
下黒駒
尾山
500m
0
500
1000
1500

第2図　遺跡付近地形図

第1章　遺跡の概観

1. 遺跡の位置

東八代郡一宮町国分949番地　桃畑内

2. 自然環境

一宮町は，甲府盆地の東部に位置し，北に山梨市，勝沼町，西に石和町，南に御坂町と接し，東は，御坂山系の達沢山などの山々となっている。北東から南西の方向にのびる断層崖の下に，笛吹川の支流である金川をはじめ，日川（につかわ），京戸川，大石川等の幾筋もの河川がつくった扇状地が複合して，合成扇状地を形成し，大部分北西になめらかに傾斜している。特に，今回調査した現場から約200m西にある金川は，一宮町と御坂町の境を流れ，御坂山系に源を発している。この金川の扇状地は，本県では最大級のものであり，全体的に花崗閃緑岩を主とし，御坂層の岩石を混じた岩屑の堆積によってできている。一般にこのような花崗岩類からなる地質をもち，いくつもの大きい河川が合流する地域では，大水害が起こりやすく，昔からこの地でもしばしば大水害を被っている。（「一宮町誌」）

遺跡は金川扇状地のほぼ扇央部金川右岸自然堤防上に位置する。標高は383mである。

3. 歴史的環境

これらの扇状地（特に一宮町）から，南西曽根丘陵にあたる一帯に，古墳時代の文化の中心があり，中道町銚子塚・大丸山塚，御坂町姥塚などを初めとする数多くの古墳をはじめ古墳群もあり，その古墳の総数は膨大なものになるであろうと思われる。これらは甲斐国の古代史を研究する上で極めて重要な資料を提供している。金川原の一帯にも後期古墳が密集しており，今回発掘した古墳は自然堤防上にひとつのまとまりをもつ群集墳中の一基である。同じ一宮町の千米寺にも千米寺古墳群といわれる群集墳がある。

また，この金川に沿って，古代律令制期から交通上極めて重要な意味を持つ，甲斐路，すなわち駿河国で東海道本路から分岐し，国境の籠坂を経て，御坂峠を越え甲斐国府に通ずる交通路がある。

甲斐国府の所在地については諸説があるが，御坂町国衙（金川西側）はほとんど確実なものと思われ，春日居町国府（笛吹川北側）も，御坂町国衙よりひとつ前の国衙所在地として有力である。いずれにしろ甲府盆地東部のこの地域は古代政治の中心であったことはまちがいない。発掘した国分1号墳の北約700mのところには甲斐国分寺址があり，さらにその北には国分尼

寺址もある。

以上甲斐国の歴史を究明する上に極めて重要な位置にこの遺跡は存在する。

時代は異なるが参考として附近の遺跡を上げておく。発掘地点の東，国分南森には土塁の跡が残っている。現在は開墾して畑となっているが，その時数多くの五輪塔を土中に埋めてしまったということである。また，国分にある広厳院からの「中山街道」と呼ばれる道も遺跡の付近を通っている。

（今沢俊比古）

参考文献

一宮町誌　一宮町

山梨県の歴史　山川出版

第2章　発掘調査の経過

8月29日　築地一号，二号墳命名。一号墳実測班と分布調査班に分かれて調査を開始。

8月30日　一号墳実測，トラバース設定。分布調査継続。

8月31日　一号墳のトレンチを設定。分布調査継続。

9月1日　トレンチ土上げ。地形測量。分布調査継続，古墳2基確認。

9月2日　地形測量。石室内部の掘下げ。

9月3日　地形測量。墳丘の確認作業。石室内部の掘下げ。

9月4日　石室の石組のレベル実測。分布調査は本日で終了とする。羨道部トレンチ掘り下げ。地形測量一部終了。

9月5日　雨のため土器洗い及び実測。

9月6日　午前中作業なし。(雨)　午後になり作業開始。大腿骨，ビーズ玉，金環などの遺物出土。墳丘の確認作業。

9月7日　裏込めの土砂を取除く。石室内部細石層をはいで第二層を出す作業の継続。午後は雨のため中止。

9月8日　裏込の土砂を取除く作業。石室内部，第二層を出す作業。墳丘確認作業。測量。

9月9日　平板測量（石室内部)。地形測量。清掃。

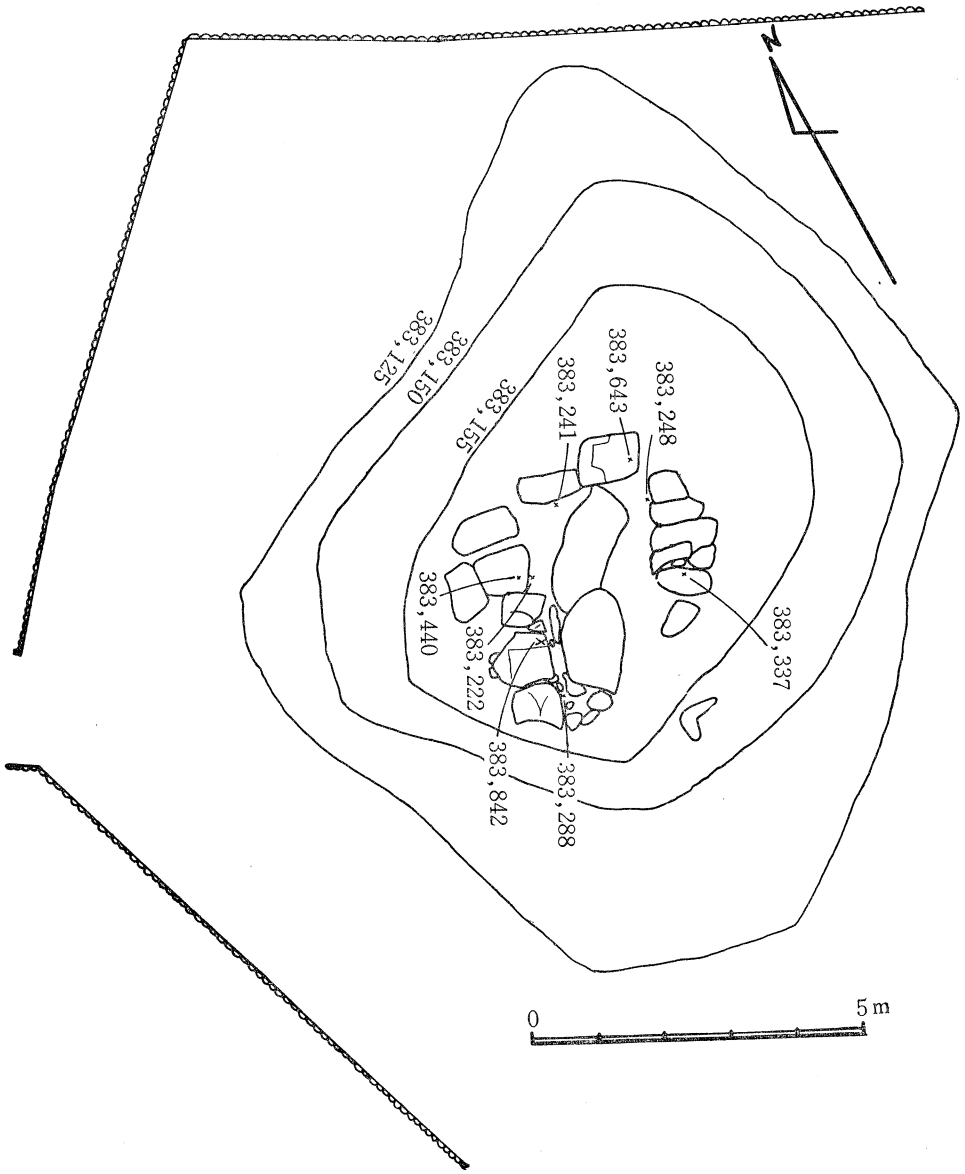
9月10日　地形測量終了。平板に最終トレンチ図の書き入れ。石室内清掃。

9月11日　セクション図をとる。写真の最終撮影。区域外の埋めもどし。テント，器具の整理。

（安部　真一）

380.50
380.60
380.70
380.80
380.90
No. 3
380.90
381.00
380.60
381.10
381.20
381.30
381.40
381.50
381.60
380.70
381.80
381.70
381.90
380.40
380.60
380.50
No. 4
380.70
380.80
381.00
No. 5
381.10
381.20
N
383.00
382.10
383.10
No. 1
382.20
382.30
382.40
383.10
383.10
383.20
0
10m

第3図　周 囲 の 地 形


N
383,125
383,150
383,155
383,643
383,241
383,248
383,440
383,222
383,842
383,288
383,337
0
5m

第4図　発掘前の状況

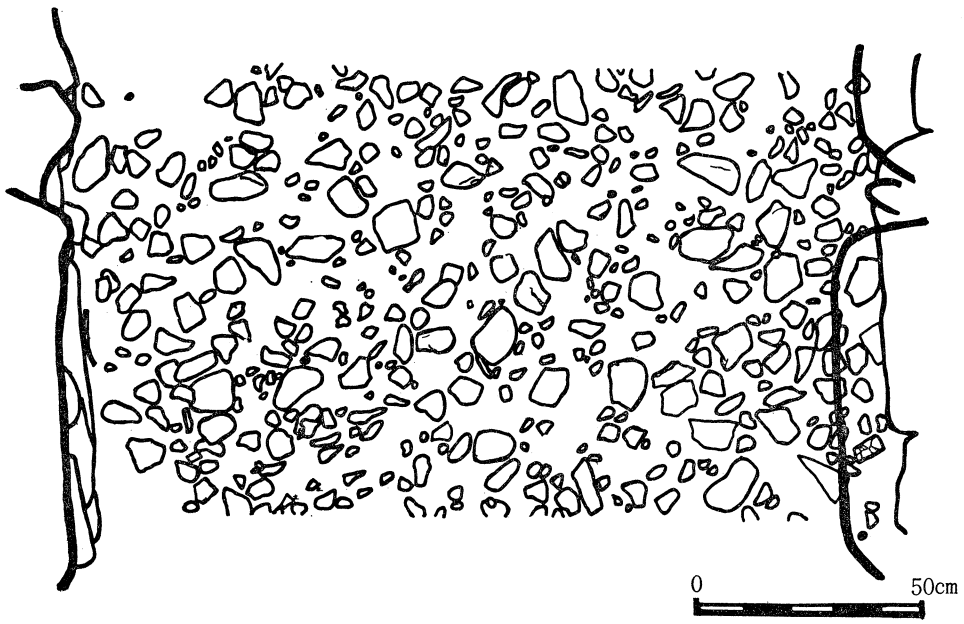
第3章　遺　　構

古墳は桃畑の中にあり，そのため破壊がひどかった。墳丘らしきものさえ全く見あたらず，横穴式石室の天井石は，崩れ落ちていた。石室は上半分が破壊された状態にあり，土地所有者の話によれば，大正期には天井石もあり，石室の高さは，約150cmであったということである。

1．石　　室

石室の主軸は，ほぼ南北を指している。南に対し19°西に向いて開口している。付近にある2基の古墳も，その主軸はほぼ南北を指している。形状は後期古墳の典型的プランをもつ横穴式石室である。平面プランは，袖がなく羨道部と玄室部の区別が明らかでない，等脚台形である。すなわち，奥壁幅207 cm（≒唐尺7尺＝207.69 cm　唐尺1尺＝29.67 cm），主軸長さ622 cm（≒21尺＝622.08 cm），羨門幅120 cm（≒4尺＝118 cm）となり，唐尺に非常によく一致する。これは，築造年代を考える上において，何らかの資料を提供するかもしれない。羨門部は，裏込めがそこまでで終わり，続く前庭部との境に割石が立ててあることによって区別される。

羨門部から羨道部にかけては閉塞石が存在した。しかし，古墳を潰した時に混入した石を取り除いていく際，閉塞石との区別が明確につかず，一部取り上げてしまった。残りの部分から推察すると，閉塞石の位置は，羨門部から1．2ｍまでで，その下の敷石は凹凸が激しく，玄



第5図　石室内小礫層平面図

室部敷石の間にみられるような小石はつめられていない。

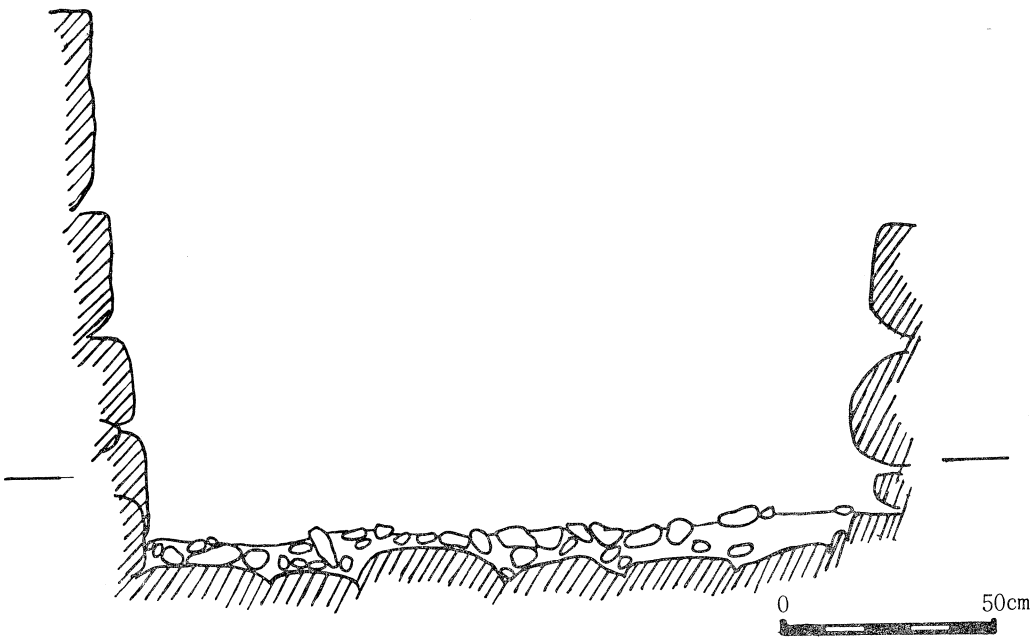
石室内の底部の高低差は，奥壁部から羨門部へかけて 6 cm の差があり，一定の勾配で奥壁部へ向って低くなっている。

石室底部は，地盤を 30 cm くらい掘り下げてその上に直径 30 cm くらいの石を，平らな面を上に向けて，敷き並べてあった。この面に，玉・金環類があった。その上に小礫層が 5 cm くらいの厚さで敷きならしたようにあった。礫層を何層かに分けることはできなかったが，金環の出土数（8個）から追葬がなされたことは明らかであるので，当然何層かに分かれていたものと思われ，それを見つけることができなかったのは，後世の攪乱のためと思われる。この小礫層中に多くの土師片・須恵片・鉄製品が混入していた。小礫層は，奥壁部から閉塞石にあたるところまであった。

側壁の石は，面取りした 100 cm×50 cm×30 cm くらいの石を使い，長辺部を主軸に対して垂直方向に出すように積み上げてある。奥壁は，100 cm×100 cm×50 cm くらいの石 2 つで大部分を成している。もちろん平らな面を，石室内部に向けている。天井石は残ってはいたが，位置がずれていた。石は長さ 200 cm，幅 80 cm の紡錘形をしていた。

2. 墳　　丘

前に述べたように，墳丘は，潰されており通常見られるような小山はなかった。発掘に先だ



第6図　石室内小礫層断面図

ち，測量した結果，墳丘をくずした跡が歴然と現われた。(第4図)　そこでなおよく墳丘の形を確かめるため，東西南北十文字のトレンチを入れ，その断面により，墳丘の形を知ろうとした。また，周溝・葺石・等があるならば，それらもともに見つけようとしたが，確認できなかった。

第8図にみられるように，墳丘の基底部は，石室内の高さとの関連性から確かである。従って墳丘の直径は，石垣などによりよくわからなかったが，12m 以上であることは明らかである。土地所有者の話によれば，北と西の石垣は墳端部に築いているということである。同様に，墳丘の高さは3mくらいであることが想像できる。

当時の地山の土は第8図の3層である。

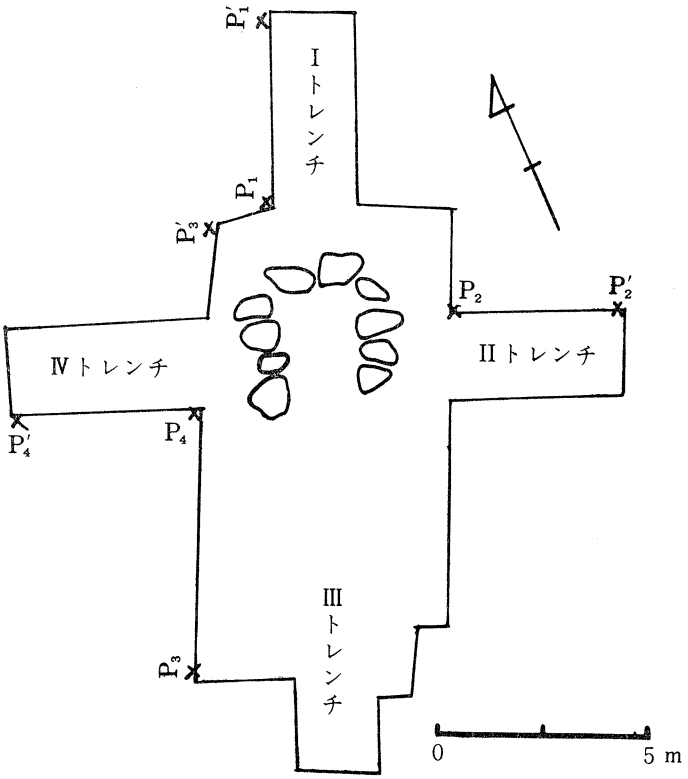
控積みは石室が半壊された状態では明らかにすることはできなかった。

また前庭部には，両側壁の延長上に，1.5 m くらい外に張り出して石が並べられていた。

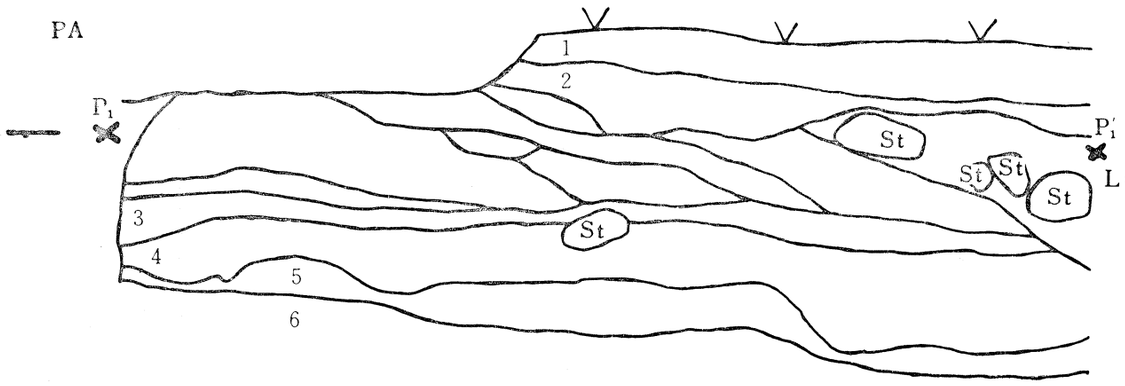
3.　羨門部西側集石

羨門部西側の第3トレンチ墳丘外で，古墳基底部と同レベルから集石が発見された，その石の間からは，土師片と多数の須恵片が出土した。集石のすぐそばの，羨門部手前からは，それに接合できるかなりの量の土器が出土していて，何らかの関係があるとも思われる。また，この石は古墳の築造に関係したものと思われ，「組石」といわれるようなものではない。しかし，この集石は，時間的余裕がなく，その全体をつかむことができなかった。ただし，トレンチのセクションでみるかぎりにおいては，古墳全体をめぐっているとは考えられない。

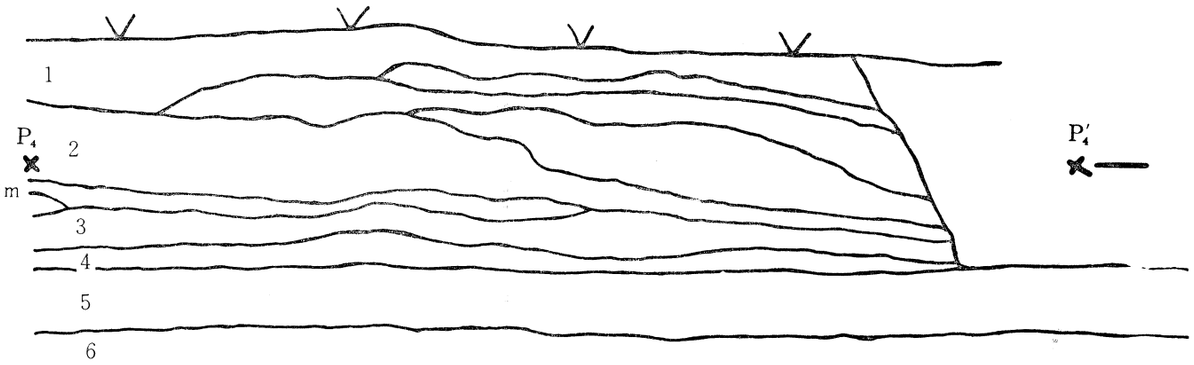
(一寸木和広)



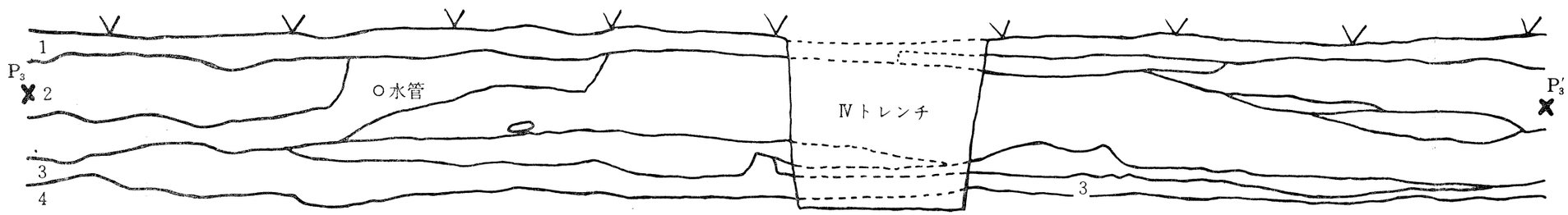
第7図　トレンチ全体図



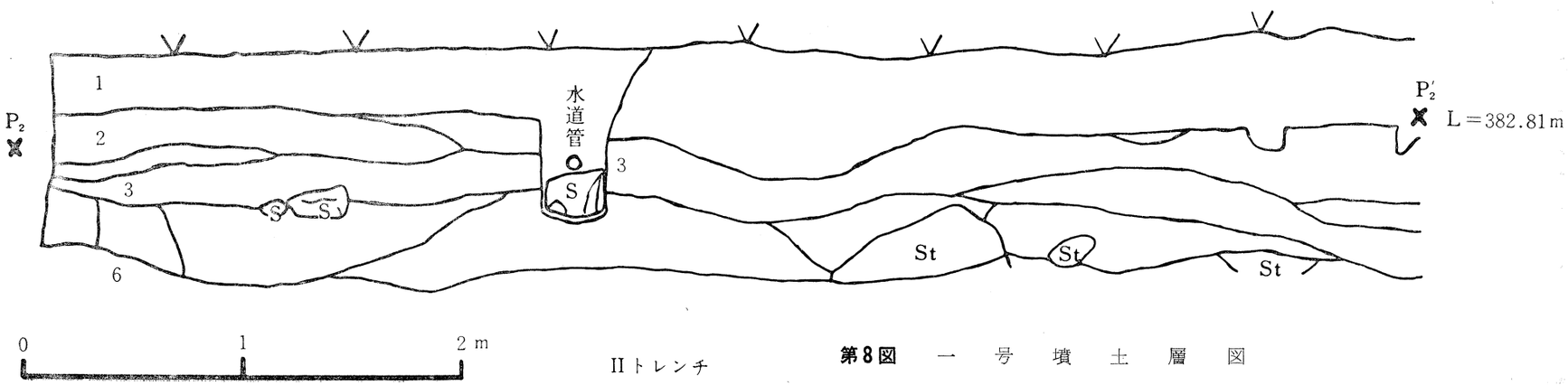
Iトレンチ



Ⅳトレンチ



Ⅲトレンチ



IIトレンチ

1. 茶褐色土（耕作土）
2. 黄褐色土層中に黒色土塊が散在するしまりの悪い土層
3. 黒褐色土
4. 淡褐色土
5. 黄灰色砂質土
6. 黄色土

第8図　一　号　墳　土　層　図

第4章　出　土　遺　物

1. 土　　器

土器片はほとんどが石室内各所から出土し主な遺物としては，須恵器の平瓶・蓋付坏，土師器の高坏・坏などがある。

しかしながら攪乱がひどく，原位地を保っているものはほとんどないと思われる。

復原の結果，時代判定資料として使用できるものに，まず須恵器がある。平瓶は器面全体に釉を帯びており，稜が丸味をおびている。口径は 5.7 cm で，これは楢崎彰一氏による須恵器分類の第1段階（7世紀前後）のものに比定されると思われる。他にも平瓶と思われる破片が2片ほどあるが，それも同形式と思われる。(10図—1，9)　蓋付坏は身の部分4個分と，蓋の部分1個分が復原できたが，型式・焼成ともにほぼ同じである。但し蓋が身のいずれのものかはわからない。時代的には平瓶と同時期のものと思われる。(10図—2，3，4，5，6)

また，たたき目を有するかなり厚手の須恵器片がかなりの数出土しているが，器形は不明である。(10図—7，8)

次に土師器については，高坏と坏が主要なものである。No. 6は口径 11 cm で，高さ約 3.8 cm。No. 7は，口径 14.8 cm，高さ約 3.6 cm である。共に黒褐色を呈し，胴部に稜をもち，口縁部が外反する。No. 8は，口径 14.1 cm，高さ 3.5 cm。稜をもち，口唇部はやや内湾し，黒褐色を呈する。これは，石室の開口部から出土した。

高坏は2個出土した。脚部がややふくらみを帯びてのび，脚端近くで著るしく裾を開く。器面全体に朱が塗布してあり，坏部には稜を有する。これらはすべて鬼高期のものと比定され，古墳築造期のものと思われる。前庭部中央から出土したが，あるいは二次埋葬の際石室外に出されたものであろうか。No. 3は口径が 13.5 cm で，底部に糸切痕を有し，轆轤使用の痕跡が見られる。高台を持ち，胎土は黄褐色で焼成も割合良い。これは，国分Ⅰ期と思われる。

須恵器と同様に器形の不明な厚手の土師片が多量に石室内の各所から出土している。たたき目を有し，焼成・胎土共に粗雑であるが，同一個体のものと思われ，破片の数量からみてかなり大きな土器と思われるが，口縁部・底部などの部分はまったく出土していない。わずかに頸部らしきものが一片あるだけである。おそらく大甕であろう。また西壁中央部付近からは国分Ⅱ期かと思われる土器が出土している。(11図—9，10，11，4，5)

これらは細かく破砕されてはいたが，一カ所にまとまって小礫層上から出土した。各々について述べてみる。

No. 4は，口径 13.8 cm，高さ 3.6 cm。赤褐色で，玉状口縁，ヘラ調整を有する。

No. 5は，口径 14.5 cm，高さ約 3.3 cm で，No. 4と同様である。

No. 9は，口径12.3 cmで，口唇部は外反し，高さは2 cmである。底部にへら調整が施こされていて，胎土は赤褐色を呈する。

No.10は，口径12.6 cm，高さ2 cmで，口唇部はやや外反する。底部はそり気味である。

No.11は，口径12.2 cm，高さ3.7 cmである。器肉は薄く，焼成も良い。また，前庭部より灰釉が20片ほど出土し，口縁部及び胴部が図上復原された（10図—10，11図—12）

以上，土器の年代は，その最も早いものが，古墳の築造年代に合致すると思われる。

（宮下　敬子）

2. 金　　環

この古墳からは計8個の金環が出土している。それらは，この時代の横穴式石室の用いられ方を示唆するものとしてたいへん貴重な資料になると思われる。

金環はすべて銅を芯としてまわりに金をはったもので，後期古墳において一般的にみられるものである。発見時においては緑青が全面を被い，一部に赤色の酸化物（酸化銅）が現われていた。

以下それぞれについて説明してみたい。

No. 1

東壁近くの敷石上から出土したもので，歯と並んで出土し，その付近には玉類が散在していた。No. 2と一対をなすもので，発見されたものの内では最大の大きさをもつ。金箔は9割ほど残っている。

No. 2

No. 1より50 cmほど北によった，敷石上から，石と石とのすきまにはさまって直立したような状態で出土した。付近には玉類及び鉄器が出土。No. 1と対をなし，9割5分ほど金が残っている。保存状態は発見されたものの内では最もよい。

No. 3

石室中央部の敷石上にNo. 4と8 cmくらい離れて，並んだ状態で出土した。その西側20 cmほど離れたところにガラス小玉が出土している。No. 4と対をなし，5割ほど金箔が残っている。

No. 4　No. 3に同じ。4割ほど金箔が残っている。

金　環　計　測　値

	1	2	3	4	5	6	7	8
直　径（mm）	20.16	21.75	18.75	19.0	17.5	17.5	14.5	14.6
高　さ（〃）	6.4	6.4	6.0	5.9	5.5	5.6	4.8	2.7
厚　さ（〃）	4.6	4.4	3.5	3.6	3.5	3.6	2.3	2.4
間隙巾（〃）	1.4	1.6	1.0	1.0	1.4	1.2	1.2	1.6
重　量（g）	9.5	9.0	6.0	6.0	6.5	6.5	3.0	3.0

No. 5

東壁際の上に，No. 6と5 cmほど離れて，壁に沿う方向に並んで出土した。No. 6と対をなし，9割ほど金箔が残っている。

No. 6

No. 5に同じ，同様に9割ほど金箔が残っている。

No. 7

No. 1より20 cmほど北よりの敷石上にあったもので 附近にはNo. 1の項で記した玉類が散在していた。これは一見板を環にしたように見えるほど高さに比べて厚みがない。直径はNo. 8と同じくらいであるが，高さが著しく異なる。7割ほど金箔が残っている。

No. 8

奥壁際の敷石上で発見されたもので，非常に小さい。4割ほど金箔が残っているが，その保存状態は最も悪く，金のはがれた部分には赤色の酸化銅があらわれている。

以上8個の金環は，1—2，3—4，5—6，7，8という組に分かれる。しかし，これらの金環を用いた人々が，どういう順序で埋葬されたかは，これらすべてのものが同一の敷石上，つまりこの古墳の床面上より出土したため層的にはつかむことができなかった。

金環のくわしい計測値は左の表のとおりである。なお金環の材質については，山梨大学教育学部化学研究室の方々にご教示いただいた。記して謝意を表します。

参 考 文 献

新版考古学講座・特論　雄山閣

3. 玉　　類

1号墳の石室内部より49個の玉類が出土している。これらは石室中央より奥壁までの間にA・B 2群に分かれて出土した。

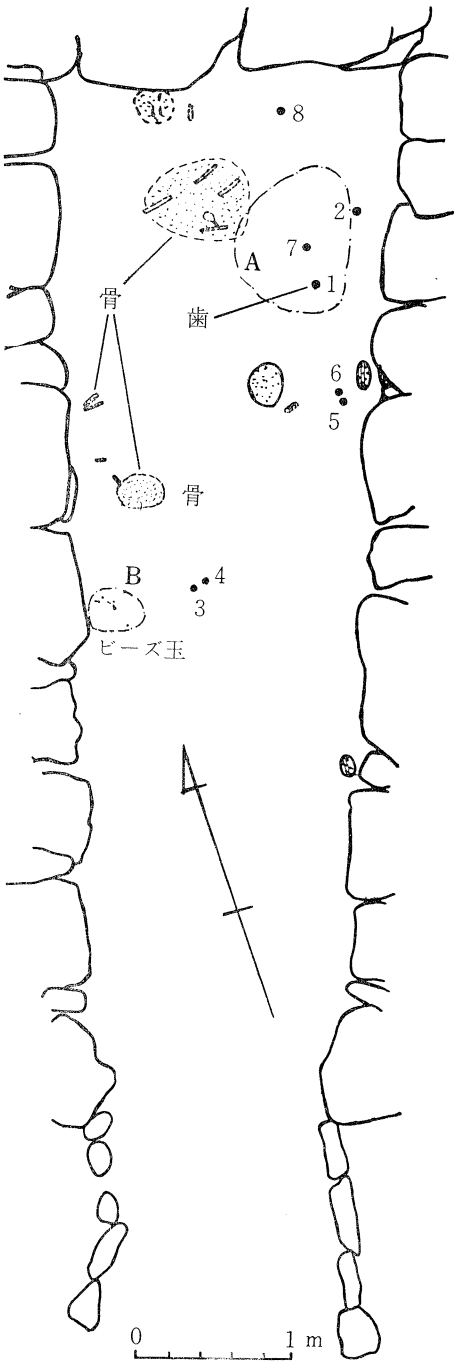
A群は石室中央部西壁より，礫層中に30 cm四方くらいの広さをもって散在していた，アルカリ石灰ガラス製の小玉のみから成る一群である。A群の東20 cmの点に金環No. 3，4が並んでおり，またA群の北側には一面に骨紛が広がっていた。

B群は奥壁附近西壁よりに，敷石の上及び間にはさまるような状態で出土した。切子玉，丸玉，臼玉，鉛ガラス製丸玉及びアルカリ石灰ガラス製小玉より成る一群である。切子玉・丸玉・臼玉・鉛ガラス丸玉は金環No. 1のまわりに集中して出土した。しかしアルカリ石灰ガラス小玉は1 m² 四方くらいの広さにわたってポツリポツリと散在するという状態であった。

以下それぞれについて説明してみたい。（9図）及び（図版12）参照。

No. 1　水晶製の切子玉である。気泡が多く整形も粗雑である。穴は片側より穿孔されている。

No. 2　ジャスパー製の丸玉。両側より穿孔されており，いたって良質のものである。



第9図　石室内遺物出土状況

No. 3　臼玉。表面には気泡が多くある。穴は径が等しく穿孔されている。

No. 4　光沢が有り，黒い粒子が数個表面に突出している。穴は両側より穿孔されており，穴の中央部に落ち込みがある。**No. 5**，**No. 6** ともに小玉で，この3つには穴のあいている両面に似たような「突起をもった円形状のおちこみ」がある。おそらく玉の製造法のひとつが反映してできたものと思われる。穴は一様な径をもっている。

No. 8，**9**　小玉。No. 3～9は滑石と思われるが（爪によって簡単に傷がつく），はっきりしない。

No. 10～23　14個の緑色鉛ガラス製丸玉。発見時においては，白っぽい茶色をしていたが，それらが卵の殻がはがれるように剝離していき，内部より真珠光沢をもった白色の層にくるまれた緑色のガラスが現われた。これらは鉛ガラスが風化されてこのような状態を呈すようになったのである。No. 11，12，15には穴を中心として渦巻き状に広がっていく皺が見られる。これは谷原2号墳でも示摘されているように巻付法によって作られたものであろう。

No. 24～49　アルカリ石灰ガラス製小玉である。直径は2.8 mm～3．8 mmほどであり，色は紺色（淡い紺色，緑がかった紺色も含む）（19個），淡緑色（4個）黄色（2個）と3色である。No. 24は胴部下方に張りがあり，巻付法によって製作されたと思われる。他は管切法と考えられるがはっきりしない。

以上のように，この古墳から出土した玉類は小型であること，勾玉を欠いていることなどが特徴である。ただし持ちさられた可能性が大であることは注意しておかなくてはならない。また，ガラ

スの色が3色と多彩であり，鉛ガラスが出土していることなど後期古墳的時代を浮かび上がらせるに十分であると考えられる。鉛ガラスが古墳石室内より出土した例として，関東地方においては神奈川県相模原市谷原2号墳より丸玉35個（破砕品を除く），千葉県我孫子町白山1号墳より丸玉6個などがあるがいずれも後期古墳である。

なお，本稿を書くにあたり，御意見，資料などを提供していただいた小田幸子氏に紙上をもって感謝いたします。

（室伏　徹）

参考文献

谷原　1972年　谷原遺跡調査団

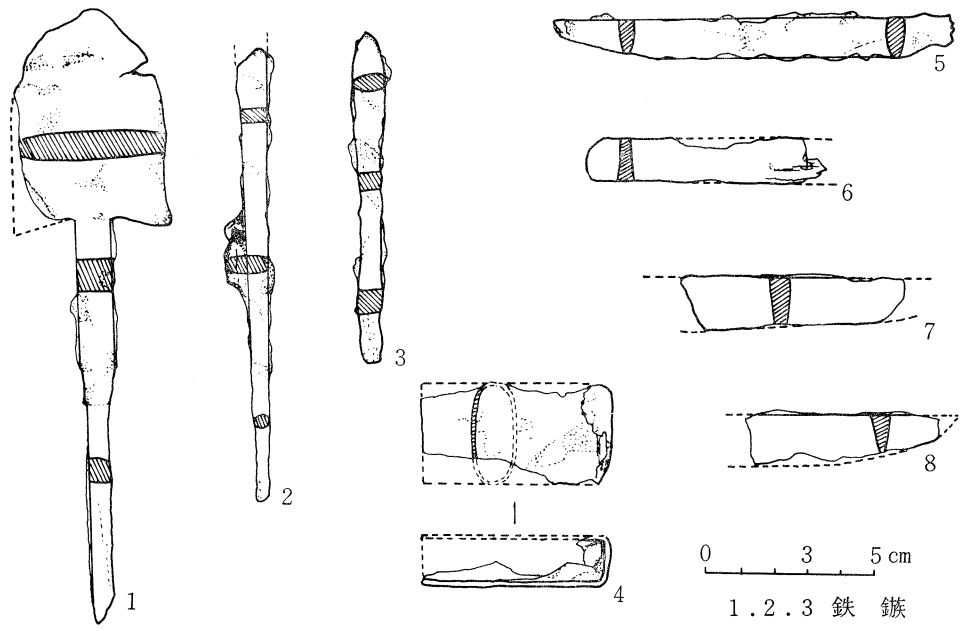
我孫子古墳群　1969年　我孫子町教育委員会

新版考古学講座・特論　雄山閣

玉類計測値表

No.	色調	径	厚さ	材質	No.	色調	径	厚さ	材質
1	透明	12.0	14.8	水晶	26	紺	7.0	3.5	アルカリ石灰ガラス
2	暗緑色	10.4	8.6	ジャスパー	27	〃	6.3	5.0	〃
3	茶褐色	9.0	6.2	滑石？	28	〃	6.8	3.7	〃
4	褐緑色	8.6	6.2		29	〃	7.2	4.6	〃
5	暗褐色	5.0	6.5		30	〃	5.1	3.6	〃
6	暗褐色	5.7	5.1		31	黄	5.0	2.9	〃
7	明褐色	6.7	5.8		32	淡緑	4.7	3.1	〃
8	〃	5.8	4.4		33	紺	4.8	2.9	〃
9	〃	7.0	5.8		34	〃	4.6	2.8	〃
10	白（緑）	8.8	4.9	鉛ガラス	35	〃	4.5	3.2	〃
11	（緑）	9.0	6.8	〃	36	〃	4.7	3.1	〃
12	緑	9.3	5.8	〃	37	〃	4.6	2.8	〃
13	緑	9.8	5.4	〃	38	〃	4.4	3.4	〃
14	白緑	8.4	5.8	〃	39	〃	4.2	3.2	〃
15	（緑）	9.1	6.8	〃	40	〃	3.4	2.4	〃
16	緑	8.1	6.2	〃	41	〃	4.2	2.6	〃
17	緑	9.6	4.9	〃	42	淡緑	3.7	2.3	〃
18	緑	7.9	4.6	〃	43	淡緑	3.4	2.0	〃
19	緑	7.9	5.7	〃	44	黄	3.8	3.6	〃
20	緑	8.4	4.7	〃	45	紺	3.5	2.5	〃
21	緑	8.8	6.7	〃	46	紺	3.8	2.0	〃
22	白（緑）	—	3.3	〃	47	淡緑	2.0	2.0	〃
23	白（緑）	8.2	5.8	〃	48	紺	2.0	1.3	〃
24	紺	8.5	6.5	アルカリ石灰ガラス	49	紺	—	2.0	〃
25	〃	7.1	4.9	〃					

（単位　mm）



第10図 鉄 製 品 実 測 図

4. 鉄 製 品

鉄鏃 3

ほぼ完全なものとしては一点だけである。尖頭部が五角形をしており，あごの部分は逆刺になっている。尖頭部に比較的短かい棒状部がついた後に茎がつづいている。いわゆる棘篦被式である。尖頭部は偏平で総体に大形であり，全長 14 cm を計測できる。尖頭部の片側に布目痕が認められる。太い糸を平織にしたものらしく，あるいは副葬されたとき袋などに入れられていたのかもしれない。（No. 1）

他に，茎の部分が欠損していて，尖頭部が木の葉状のものがあり，7.5cm の長さを計測できる。（No. 3）

また棒状部とそれに続く茎の部分だけしかないもので，11.5 cm と計測できるものがある。（No. 2）

数的に非常に少ないが，攪乱によって失なわれたものも多いと思われる。

刀子 5

やはりほぼ完全なものは1点のみである。全長は 9.6 cm であるが，切先の部分と茎の部分が少し欠けている。身の長さは 9.2 cm で，角棟平造，切先はゆるいカーブを持ついわゆるふくら切先である。また関（かまち）は刃関のみを有する。遺存状態は割合よい。（No. 5）

他はすべて短かい残欠のみである。

刀装具　5片

直刀自体の出土はみられなかったが，刀装具と思われるものがあった。ほぼ同じところから出土しているので，5片全部でひとつの刀装具であろう。袋状の金具2片は，割合小さめであり，鞘尻金具のようである。他の3片も，鞘の金具であろう。

このうちの2片には明らかに木痕が見られる。

そ　の　他

他に2カ所から鉄製品の出土はあったが，剝離が激しく，まったく復元不可能である。

鉄製品はそのほとんどが，小礫層中から発見されている。平面的には東壁よりのすみに多く，形の判別できるものはすべて東壁下から出土している。　（渡辺　孝子）

参　考　文　献

世界考古学大系　日本Ⅲ
谷原　1972年　谷原遺跡調査団

5．骨　　等

西側壁中央部の石積の最下段とその上の石とのすきまにつめこんだような状態で大腿骨2本が，上下の端を欠いて出土しているが，あまりに単独に存在したため追葬においてそれ以前の埋葬者の遺骨をこの様に処理したのか，あるいは，側壁最下段まで埋没した時何らかの形でこの古墳にもちこまれたかは不明である。

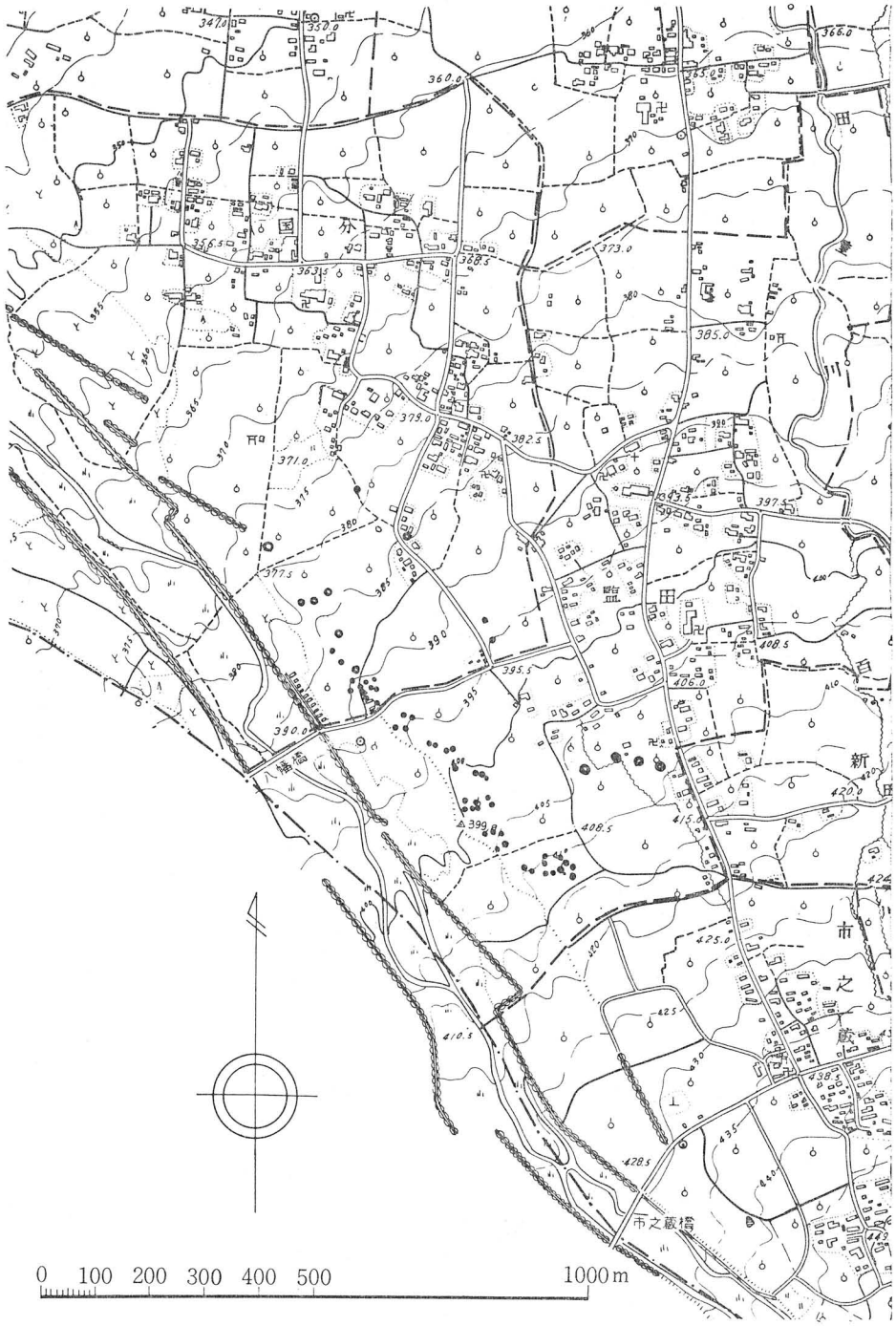
また小礫層上の中央部西壁寄りと，奥壁付近に，多量の骨粉があった。おそらくこの付近に遺体が置かれていたのであろうが，その後の攪乱などにより移動した可能性があるので，この2カ所のみに遺体がおかれたと断定することはできない。

また歯が1点東壁近くで，金環に接した状態で出土している。金環からの緑青を全体にあびていたため，残ったものと思われる。非常に健全な歯で，エナメル質・象牙質などがそのままの状態で残存している。　（室伏　　徹）

第5章　周辺の古墳

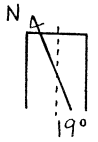
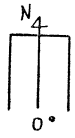
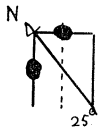
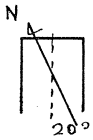
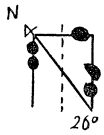
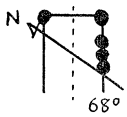
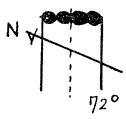
遺跡の環境のところでもふれたように，発掘調査した1号墳は，国分群集墳中のひとつとして考えられる。そこで発掘調査と並行して付近の古墳の分布調査を行ない，〝群〟として古墳をとらえる試みをしたのである。

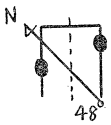
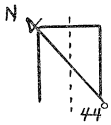
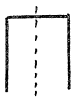
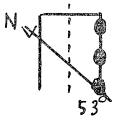
事実遺跡付近の古墳はほとんど調査されないままに，耕作などにより葬り去られてしまっている。土地の人の話ではその数は数百にも及ぶという。

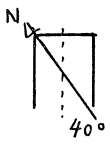
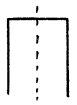
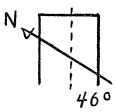


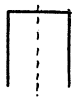
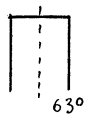
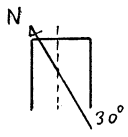
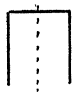
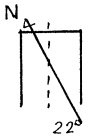
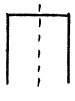
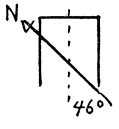
第11図　古　墳　分　布　図　(1)

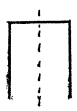
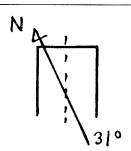
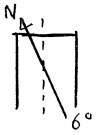
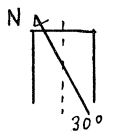
分　布　調　査　表

番号	小字及び番地	石室規模 奥行	石室規模 幅	方向	備考
1	築地 949	6.0	2.0		今回の発掘の古墳
2	堀米 289〜1 豆塚	—	—		直刀出土 「一宮村国部字堀米にあり石室尚存す。周囲二十間許ありしが十年前に開墾す。」(東八代郡誌)
3	築地 920〜1	4.1	1.7		奥壁らしい石がある。 後に石が積まれたらしい。
4	築地 920〜1	7.0	1.4		側壁の大石が残存 天井石が落ちている
5	築地 920〜1	5.2	1.5		奥壁側壁の大石残存
6	南森 967〜1	5.6	1.7		
7	南森 968 重右衛門塚	—	—		マウンドの盛り上がりが見られる 「南森にあり。大きさ八間許。石室は入口四尺，奥行五間位あり。此塚の西及び東にも殆ど同大のもの存在せしが，いづれも今は開墾して跡を留めず。」
8	南森 968〜1	6.4	1.6		奥壁が認められる
9	968〜3	—	—		石があとから積まれたため石室の状態不明

番号	小字及び番地	石室規模		方向	備考
		奥行	幅		
10	南森 968～4	5.6	1.8		石室内部に石が敷かれている
11	南森 969	—	—		マウンドはない。石室が石にうまっている マウンド　奥行 5.5m，幅 4 m
12	南森 970～1	—	—		現在開墾されてわずかに微高地をとどめるのみである
13	南森 970～2	—	—		〃
14	南森 970～2	—	—		〃
15	南森 970～3	—	—		〃
16	南森 963～22	5.2	1.7		勾玉，切子玉，管玉，剣等出土
17	木地蔵 1144	—	—		
18	木地蔵 1147	—	—		

番号	小字及び番地	石室規模 奥行	石室規模 幅	方向	備考
19	木地蔵 1152	—	—		
20	木地蔵 1150	—	—		
21	木地蔵 1168	—	—		
22	木地蔵 1170	—	—		畑の石垣として石室の一部がほぼ現位置を保ちながら使われている
23	木地蔵 1171	—	—		石室部分は畑からの石でつみ上げられている
24	木地蔵 1175	—	—		
25	木地蔵 1178	—	—		道のそばに一段高いもり上がりがある
26	木地蔵 1181	—	—		マウンド　奥行5.5m，幅4.5m
27	木地蔵 1183	—	—		

番号	小字及び番地	石室規模		方向	備考
		奥行	幅		
28	木地蔵 1185	—	—		
29	木地蔵 1187	3.8	1.7		
30	木地蔵 1206	—	—		
31	木地蔵 1219	4.5	2.5		マウンドはけずられてはっきりしない。側壁，奥壁の石が残存
32	木地蔵 1256	4	1.5		石室内部は幅 80 cm ほどである。 古墳最末期の竪穴式横穴式石室と思われる。
33	堀米 365	—	—		現在道路となっていて影をとどめない
34	築地 899	—	—		
35	笠木地蔵 857 聖塚	—	—		「笠木地蔵にあり。石室は入口四尺，奥は八尺，奥行四間許。明治二十四年三月頃開墾して今は全く畑地となれり。附近より人骨・土器の砕片を発見せられ，また附近に五輪塔の不完全なるものなどありき」
36	笠木地蔵 856	5.8	1.5		奥壁か天井石と思われる石露出

番号	小字及び番地	石室規模 奥行	石室規模 幅	方向	備考
37	小新田 920 八幡塚	—	—		「同村塩田には古墳甚だ多く，大小凡そ三百有余もありつらん。今は大低開墾せられ桑園となれり。発掘の際，金環・古刀・土器等の発見許多ありしが，多くは散逸せり。楽音寺境内に四基現存せり。一を孤塚，一を蝙蝠塚，一を稲荷塚といい，一は無名塚なり。」
38	小新田 944 孤塚	7	2		
39	小新田 922 蝙蝠塚	7	1.9		両袖型，マウンドの直径約10m 保存状態は良好
40	小新田 932〜3 稲荷塚	7	3		マウンドの直径12m高さ3.5m盗掘穴が何ケ所にもあけられている。天井石の一部がはずれている　人物埴輪出土

今回は，1号墳付近50 haほどを限なく調査したが，古墳としての原形をとどめているものはほとんどなかった。

分布調査によって古墳群としてとらえられたことは分布調査表のとおりである。

1. 古墳の規模形状石材

古墳の規模は，石室が幅150 cm，長さ500 cmくらいの小規模な平面プランを持つものがほとんどであり，幅が200 cmを越えるものはあまりない。ただし大きいものと小さいものはある程度のグループに分かれてまとまりをもっているように思われる。石室は横穴式で，規模の大きいものは，両袖型のものと袖無しのものに分かれている。小規模のものは，石室の長さ300 cm，幅80 cm，高さ60 cmぐらいで天井石に偏平な割石を使った，横穴式の手法を示しながら事実上は竪穴的に埋葬せざるをえない類のものである。

古墳のマウンドはそのほとんどが耕作土として削り取られてしまっており，その上に氾濫による礫塊などを積みあげてあるものが多く，原形をとどめるものはほとんどない。従って，調査も聞き込み，ボーリングなどに頼らざるを得なかった。しかし100％円墳であることは周囲の状況などからほぼまちがいないであろう。

前述したように，石室は末期古墳の様相を呈して小規模ではあるが，使用した石材は，栗石のような小さなものでなく，大形の石を使用してある。金川の氾濫原であるこの地域では石は

すべて御坂山魂から破砕され流れてきた花崗岩を使用している。現在以上に氾濫をくり返していたであろう金川によって運ばれた石で古墳は容易に造営できたと思われる。

2. 古墳の立地

一万分の一の地図に引き写してみた分布図（第11図）でわかるように，古墳は金川の自然堤防に並んでいる。しかも二つの自然堤防上に並んで2列を成している。

また聞き込みによれば，御坂層の岩屑の堆積によってできた扇状地であるので，遺跡付近では特に土は貴重なものであり，田畑はその多くが客土によって耕作されている。そして古墳は土のあるところにだけ築かれているということである。

立地とは直接関係はないが，分間図（第12図）を見てわかるように，古墳の存在した場所というのは，田畑の中で小さな別区画を占めている。このように見れば，逆に分間図から古墳の存在する場所を推定していくことができる。今後群集墳を群単位で調査するにあたって何らかのヒントとなるであろう。また，分間図作成の年代までに，図に表われただけの古墳が存在したとすれば，それまでの破壊を考えるとその数は膨大なものであったと思われる。

3. 石室の方向

石室の開口部方向については，富士山を向いているのではないかという仮説のもとに調査を進めた。しかしこの仮説は，ほぼ南側を向くが，少しづつまちまちであるところから否定された。一般的に七世紀には南面に開口することが定式化されるようであるが，それに合致するものと思われる。

4. 群集墳中の支群

古墳は，その立地・規模・形状などによって，ある程度グループ分けすることができる。

自然堤防を下から上へという流れが，規模が大きいものから小さいものへ変わっていき，古墳の型式も古いものから新しいものへ変わってゆくことからとらえられる。前記したように古墳は自然堤防上に並んで，調査した範囲では2列を確認できた。そのひとつは，豆塚から，発掘した1号墳を含む一列で，金川から約200 m離れて川に沿って並ぶ群である。もうひとつは聖塚（ひじり）から狐塚・稲荷場に至る一列である。金川からは400 mほど離れた第2の自然堤防上の群である。古墳の規模は聖塚の群の方が大きく，2列目の方が，一列目の方よりも古く感じられる。

このようにして，古墳はおよそ3類に分けることができる。

A類　楽音寺付近の，狐塚古塚などを含むものである。

古墳の規模は大きく，破壊もあまりされていない。墳丘の直径は10 mから20 mほどであ

第12図　古　墳　分　布　図　(2)

る。石室は両袖型であるが，ほんのわずかなはり出しがあるだけである。自然堤防の２列目に並ぶ古墳に含まれる。

B類　発掘した古墳を中心とするものをいう。

古墳の規模はAよりも小さめである。石室は袖無型で，石室の最大幅は２ｍ前後である。自然堤防の１列目に含まれる。

C類　堤防１列目の上流一帯に散らばる小古墳。

ほとんど破壊されていて古墳であると判断するのが困難である。東八代郡誌によれば，塩田一帯に三百基の古墳があったというが，おそらくこれらのことであろう。

石室の長さ３m，幅60 cm，高さ60 cmほどで，割石の蓋をした，横穴式竪穴式石室を調査できた。

以上の３類はA～Cへと新らしくなっている。またひとつのグループの中でも新旧が考えられるが，資料が少ないため決定は困難である。

非常に大雑把ではあるが発掘した古墳の位置づけをすることができれば幸いである。

参　考　文　献　　（渡辺　孝子）

一宮町誌
東八代郡誌
山梨県遺跡地名表

第6章　考　　察

今回の調査により今まで記録の不正確だった国分地域の群集墳の存在が明らかになった。また山梨県に於いては群集墳の分布状態が調査されたことは少なく，これらの意味において本報告書は多少なりとも資料を提供することと思う。調査期間が短かかったために充分な成果を挙げることができたとはいえないが，これを機会としてさらにこの方面の研究が進められることを望みたい。

一宮町国分地域には以前から古墳が密集していることが知られていた。一宮町誌にその記録があるが，この記録は今回の調査によって，未だ記載せられざる地域のあること，又その分布状態が不明瞭な点が多いことが判明した。今回調査で確認した古墳は全部で40基程であるが，攪乱のためほとんどその形跡が残っていないために確認できなかったものも多かったと思われ，また広範囲にわたる調査が行なえなかったことは，より明確な分布状態を示すことを困難にしたといえる。詳細は「周辺の古墳」の項を参照してほしいが，主軸の方向が確認できた20基ほどの古墳は，すべて開口部が南西の方角を向いている。当群集墳の範囲内でこのような傾向が認められたということは，これらの群集墳が同一の根拠に基づいて開口部の方向決定を行なった

ことを示していると考えられる。この根拠が何であるかは今後の研究を待たねばならないが，いずれにせよ，一号墳も含めたところのこの傾向は当群集墳の大きな特徴であるといえる。次に古墳の規模であるが，調査の結果，判った範囲でもその差には大きな開きがある。そして，古墳の形態をA，B，C類に分類したように，これらの古墳相互には規模の差異だけでなく，石室の構造上にも違いがある。比較的，大規模の古墳は，A類，つまり両袖の石室を有するものが多く，規模はそれ程違わないが袖部が認められないB類，規模が極めて小さく横穴式石室の本来の機能である追葬を行なうのに支障をきたすものではないかと思われるC類の3つである。このようなことから，古墳規模の相異は，それに石室構造の違いが含まれる古墳間では権力の差を顕わしているのではなく，古墳築造に対する考え方の相違，つまり時代の変遷を示しているのではないか，と考えられるのである。さらにこの地域の古墳の調査を進めることによってこの推測はより明確になるのではないかと思われる。

さて，今回発掘調査した築地一号墳を当群集墳の有するこのような外観的傾向に照し合わせて見ると，開口部が南西を向いていること，構造上ではB群，袖ナシに既当すること等，一号墳がやはり群集墳の一つとして，それを特徴づけるような性格を荷なっていることがわかる。つまり一号墳を調査することによってこの地域の群集墳のもつ，さらに正確な特徴をある程度認識できるのではないかと推測する。

一号墳の残存状態は調査前の時点に於いて，墳丘らしきものは全く見あたらず，石室の上半分が削り取られていた。石室の内部は土砂で埋められており，さらにその上から天井石と思われる巨大な石を2つ程乗せてあった。消失している石室上部の石は付近一帯の桃畑に段差整形用として使用されたと思われる。　一見したところでは石室の規模，形態はほとんど推測できない状態であった。つまり削りとられていない部分は墳丘の中に大部分埋っており，削り取られた部分はほぼ完全に当時のおもかげを留めていなかったのである。堆積層を掘り下げるに従って，墳丘の傾斜と思われる層面があらわれ，石室の全貌も確認されるに至ったが，そこから推定される墳丘の形状，規模は直径が約10mの円墳で高さは約3m，少なくともこの程度の規模を有していたと思われる。ただ破壊がひどく進んでおり，明確に規定することは困難だと思われ，無意味だろうと考えられる。石室は当初の予想よりさらに大きく長軸約6m，幅約2mというかなり大型の規模を有していた。これは他の古墳と比較しても大型の方に属すると言ってよい。石室の構造は閉塞石を有する追葬を前提とした典型的な横穴式石室であり，先にも述べたように袖部を有さない，奥壁部に進むに従って幅が広くなるという特徴を有している。袖部を有さないのは石室構造の簡略化粗雑化を示す退化現象だと考えられ，両袖式の構造を有する石室より新しいものだと考えられる。また石室構築に使用された石は金川の河川石だと思われ天井石，奥壁を筆頭にして相当巨大なものである。これらの石を積み上げるのにはかなりの人数を要したと考えられる。これだけの石室を築き得る労働力を一人の権力者が占有していたのか，それとも他権力からの労働力の移入を行なったのか疑問の残るところである。当時，大和

朝廷の権力が徐々に地方へ侵透し複雑化していく時代的状況の中で，朝廷が上層農民層に武器の保有を認め，古墳築造を許した特権的な地位を与え，権力機構の中に組み入れようとしつつあったこと，そしてこれらの複雑化する階層分化から生じた上層農民層が家父長制的な構造を形づくっていったことなどが群集墳の出現に因をなしたと考えられる。そしてこれらの社会的背景の中に当群集墳，また一号墳を位置づけることができれば，一号墳考察の上で役立つのではないかと思う。

一号墳石室内調査の考察では，上，下２面の礫層が認められた。上面はこぶし大の小礫と砂質土を少量ともなった層で構成され，石室内（閉塞石部を除く）ほぼ全域に敷きつめられていた。下面は 30 cm 四方程度の面積を有する石で占められ，明らかに加工されたと思われるようなふしはなく，石室内（閉塞石部を含む）全域に敷きつめられていた。このことは石室が前後２時期にわたって使用されたことを示していると思われるが，この上下２面の上にさらに焼土分布域を含む層が存在するふしがあり，大正期以前の石室の非使用期，この層面が相当長期間にわたって維持されたことが考えられる。以下，下面を敷石面，上面を小礫面として扱う。
今回の調査では小礫面の攪乱が激しく，特に土器などはほとんど破砕されており，使用時期の違うと考えられるものが同一平面上に混在しているような状態であったことなどが埋葬状態の推察を困難なものにしたが，一応このような制約を考慮した上で更に考察を進めていく。

敷石面より出土した副葬遺物としては金環，ガラス玉，ガラス小玉，土玉，切子玉，刀子，鉄鏃等が挙げられよう。金環は全て下面からの出土であることが確認されている。その分布状況は東部中央から少し奥壁よりに４つ，奥壁中央部から南に 30 cm 位のところに２つ，西部中央付近から２つで全８個である。このうち，No. 5 と 6，No. 3 と 4，No. 1 と 2 が対をなしていると考えられ，No. 7 と 8 はその形状の相異から対と考えるのは不適であろう。次に玉類であるが，「遺物，玉類」の項で述べられているようにA群，及びB群に分けることができる。そのうち下面より出土したのはB群である。B群のこれらの玉類は金環５，６の周囲に分布していた。特に鉛ガラス玉14個は，数珠繋ぎであったことを示す状態で出土しており糸が腐食切断する以前の状態を示している重要な遺物であると考えられる。又，鉄製品は同じく東壁付近に多く出土したが，刀が出土していない点など一部盗掘にあった可能性が強い。これらは明確に敷石面とは言えず，小礫面，最下部出土とすべきであるが分布としてはやはり敷石面出土であろうと考える。土器はこの敷石面からは出土しなかった。ただ須恵器平瓶の口縁部が出土しているのみである。これらのことから推定されることは，金環の数から４ないしは５体以上の遺体が敷石面に安置されたと考えられること，刀が出土していないことや土器の出土が非常に少ないことによって副葬遺物の盗掘が考えられること，数珠繋ぎ状に出土した鉛ガラス玉が盗掘の際にも攪乱を受けなかった部分の存在を示していることなどである。小礫面に於いては副葬遺物が敷石面にみられたように多彩ではない。出土した土器はすべて破砕され踏みおさえら

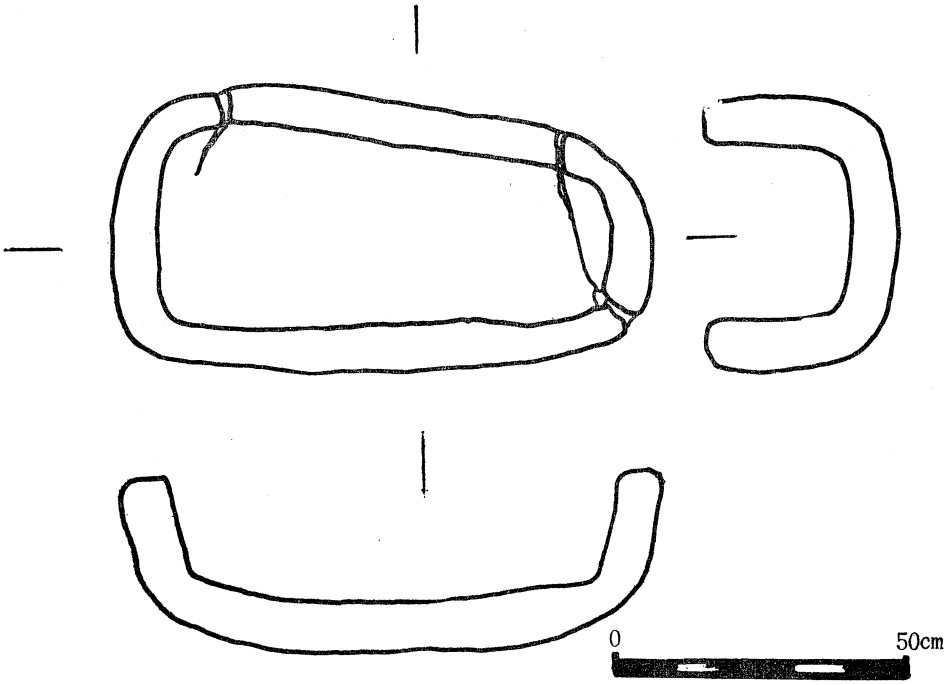
れた状態で出土している。このことは小礫面が後世に於けるはなはだしい攪乱を受けたことを示していると考えられるが，そのために小礫面に埋葬されたであろう埋葬者の埋葬状態は，全く判別できない結果になってしまった。小礫面に於いてかろうじて判ることは，国分二期頃と推定される土師器が出土していることから，平安期頃にも何らかのかたちでこの古墳が使用された可能性があるということ位である。

前庭部は敷石面と小礫面が時を違えて形成されたことを示すように２層に分けることが可能だ。その下層面に於いて，鬼高後期と推定される土師器が石室入口付近から投棄せられたような状態で出土しており，敷石面にほとんど出土土器がなかったことと関連づけられると思う。

築造年代の推定は，この前庭部出土の土師器を敷石面の副葬遺物として考えた場合，7c初頭頃ではないかと思われ，その時期をくだることはないであろう。使用年代の下限は第一次敷石面上に埋葬された時期と，第二次小礫面上に埋葬された時期がともに確証を得るような遺物の出土がないことから敢えて推定をしない方が賢明であろうと思われる。

以上今回調査の成果を述べたが，さらに残された問題として当群集墳の先に述べた３つの類型に於けるその特徴の把握，山梨県に存在する群集墳の中での位置付け等があり，今後の研究の発展を望むしだいである。　　（安部　真一）

——参　考　資　料——



第13図　参考資料　石船神社神体

石船神社神体

資料紹介の意味で，国分221番地の石船神社神体を紹介したい。この神体は，石棺だといわれているものである。全体に小さく刳抜式であり，形は家形石棺に似ているが粗悪である。蓋もない。２ヶ所にひびがはいっており，どこで発見されたかは明らかではない。（渡辺　孝子）

むすび

以上が国分群集墳の調査に関する概要である。おわりにあたり，この調査研究が私共の当初の目的に少しでも近づくことができたかどうか，疑問の残るところであるが一応の報告としたい。

私共未熟な学究ゆえ，十分な論証もできず，甚だ残念な次第であるが，今後の研究に期待し，またこの報告も本県の古墳文化解明に若干でも寄与することができるならば望外の喜びとするところである。

今後においても，先輩各位のあたたかい御批判御叱正を重ねてお願い申し上げる次第である。

発掘調査参加者

担当者　野沢昌康

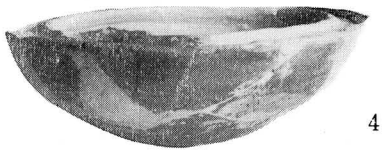
参加者　一寸木和広　西川泰正　安部真一
今沢俊比古　曽根哲也　平井宏一
小尾勇司　室伏徹　渡辺孝子
宮下敬子　志村美千子　飯島睦子
村松良子
以上，山梨大学考古学研究会会員

図　　版

図版 1　(1) 発　掘　前（奥壁側より）

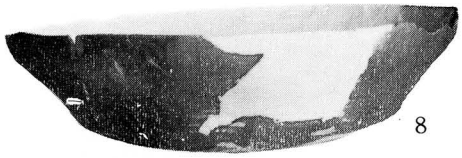
(2) 1 号 墳 石 室（羨道部より）

図版 2　須恵器及び土師器



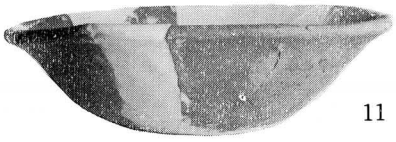
4

須　恵　器



8

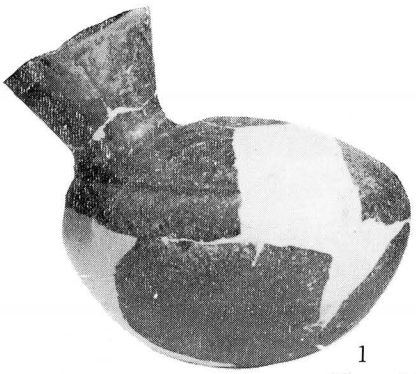
9



11

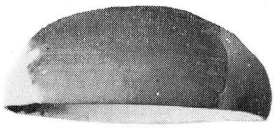
土　師　器

図版 3　須　恵　器

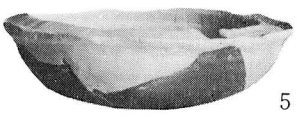


1

平　瓶



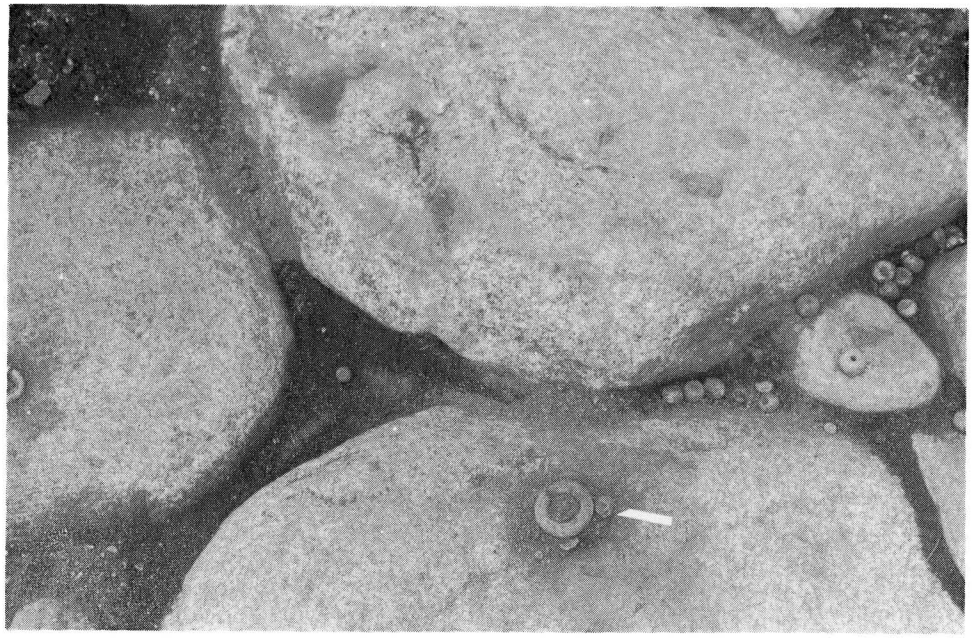
2



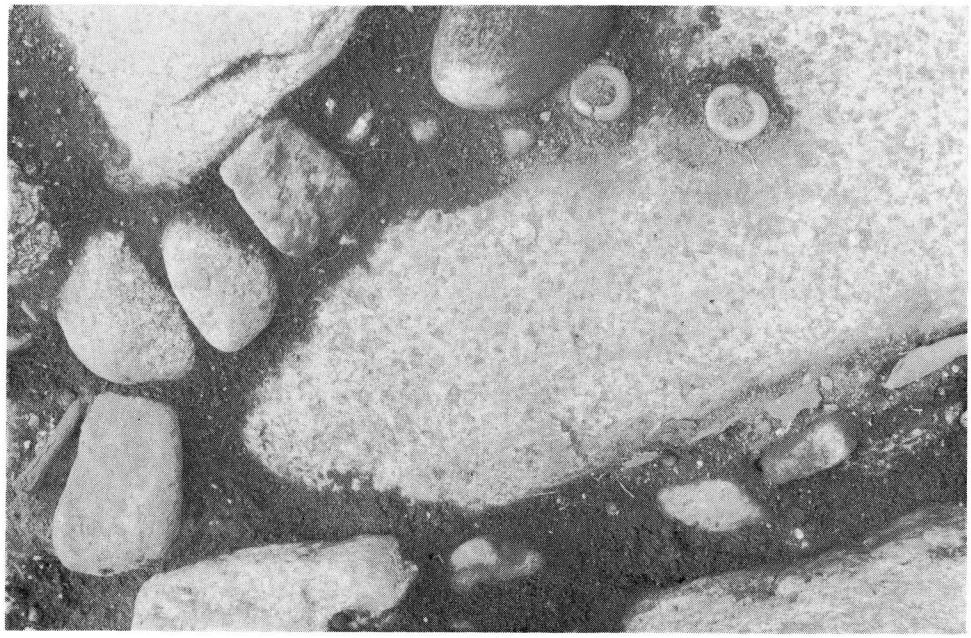
5

須　恵　器

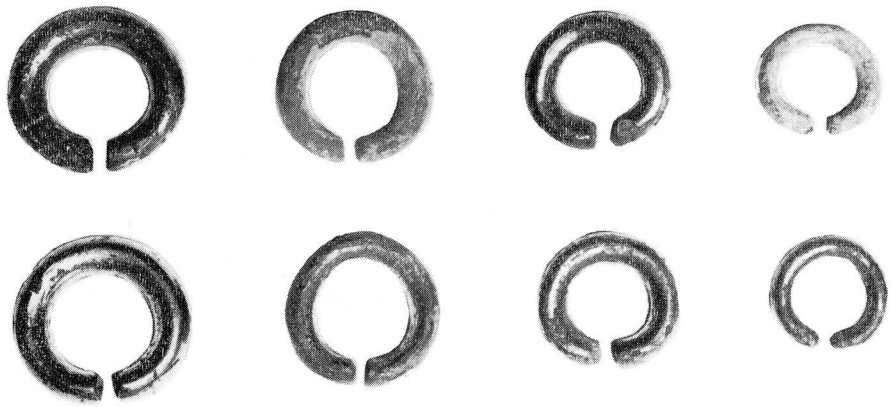
図版 4　(1)　金環および丸玉出土状況



(2)　金環および鉄器出土状況



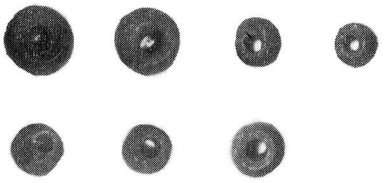
図版 5　装　身　具



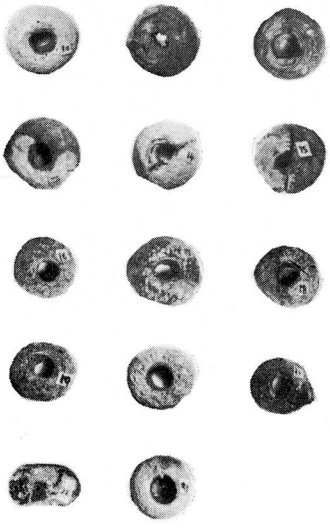
(1) 金　　環

(2) 切子玉(水晶製)

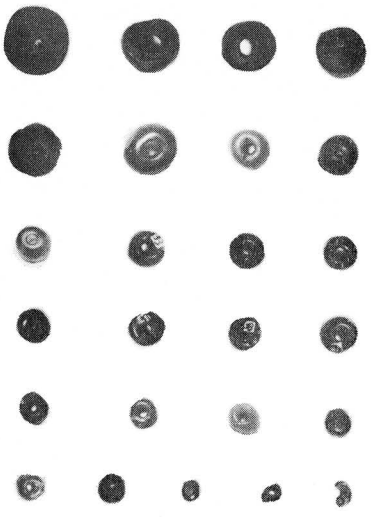
(3) 丸玉(メノウ製)



(4) 丸玉(土製)



(5) 丸玉(ガラス芯土製)



(6) 小玉(ガラス製)

図版 6　鉄　製　品

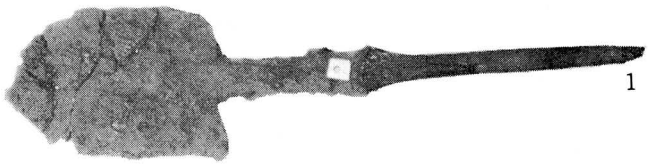
5

刀　子

4

刀鞘尻

3

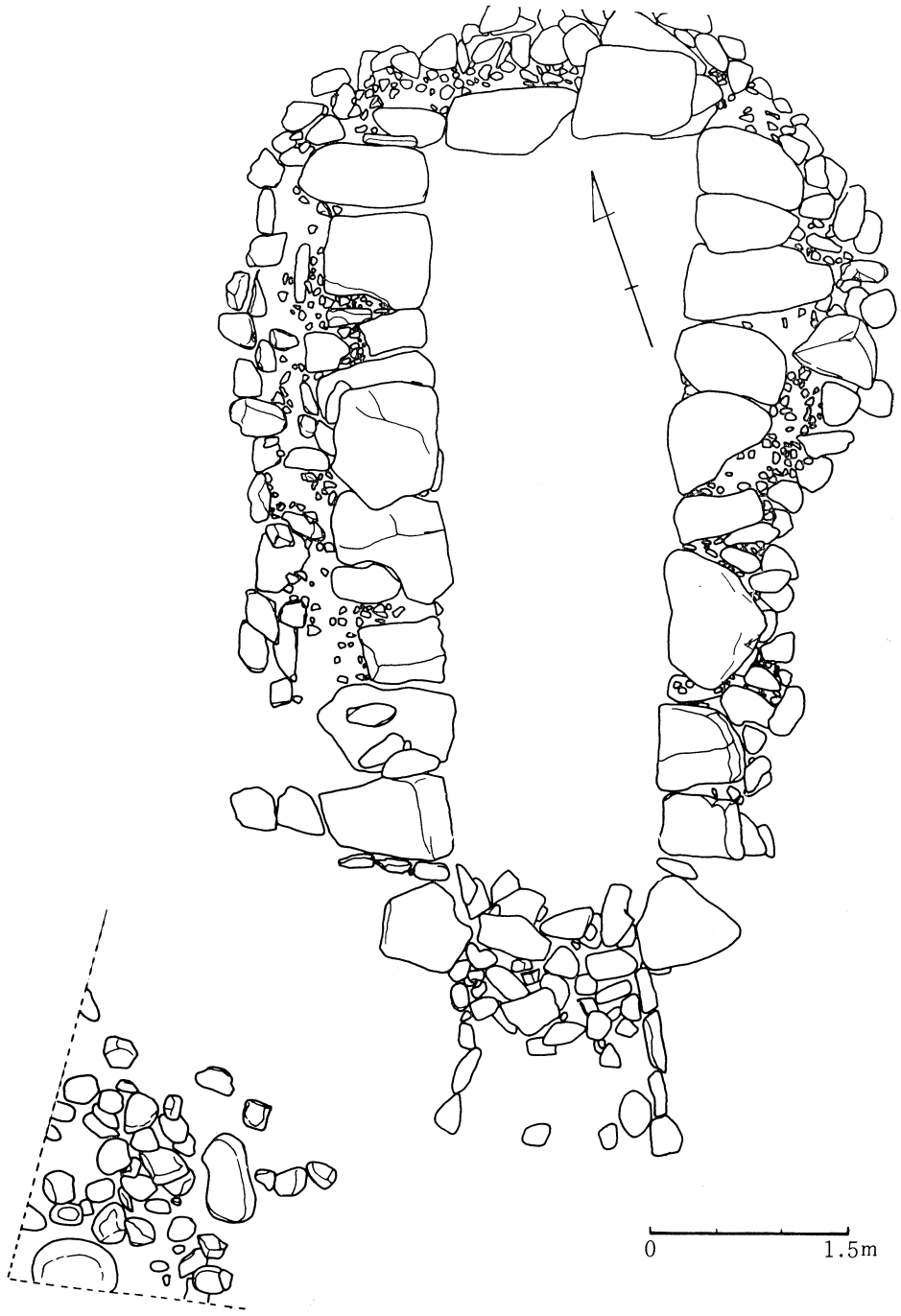


1

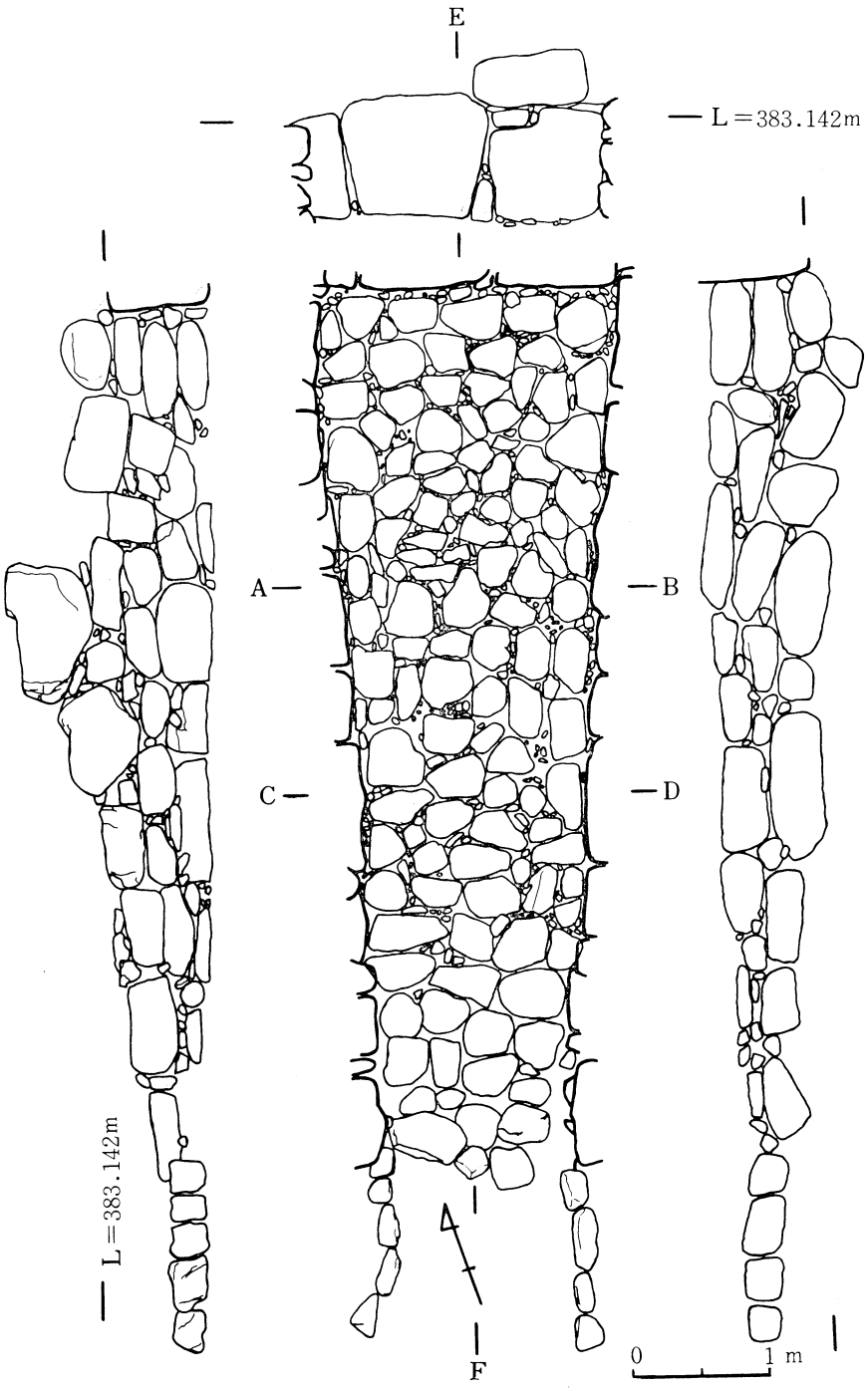
鉄　鏃

刀子出土状況

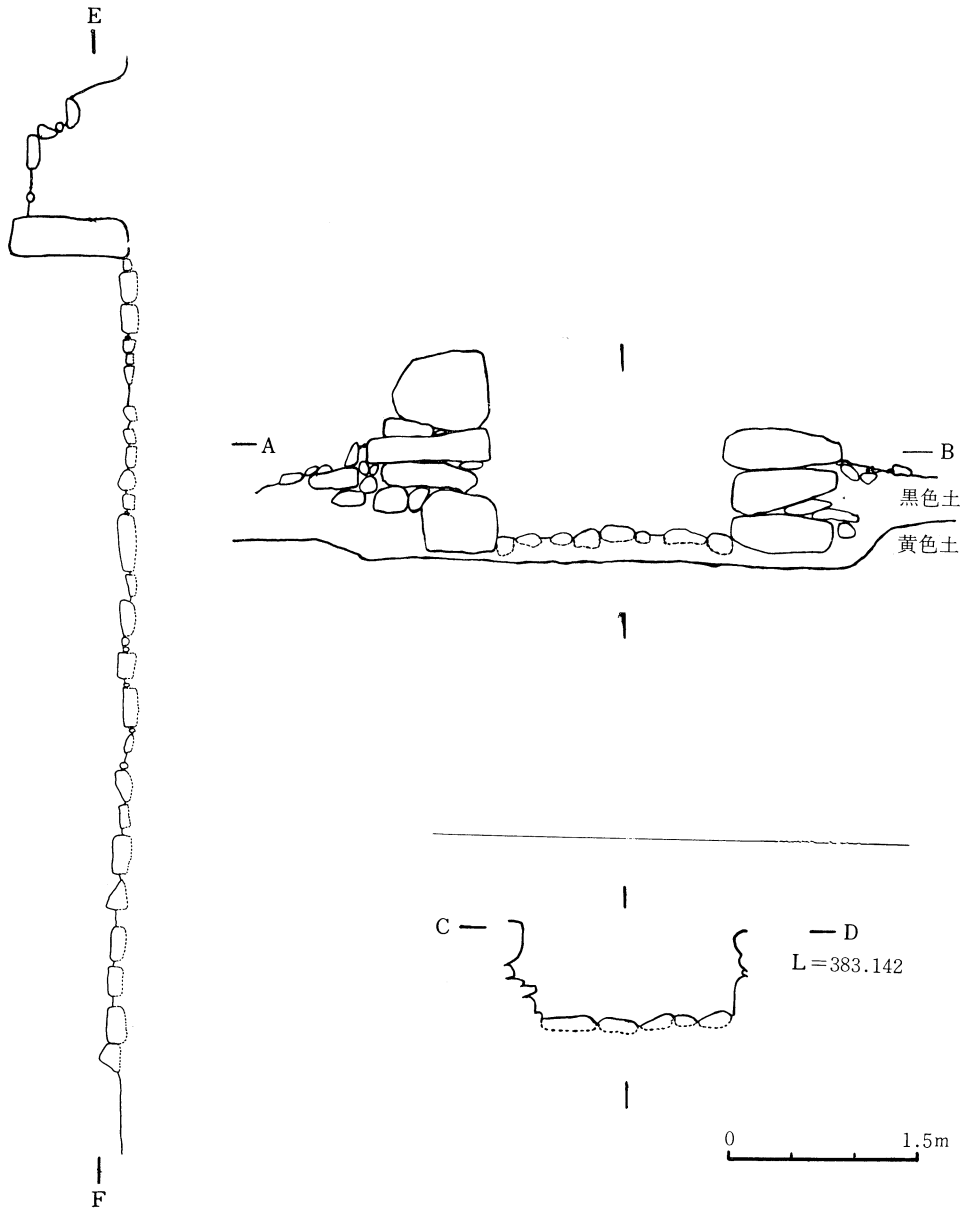
図版 7　石 室 平 面 図



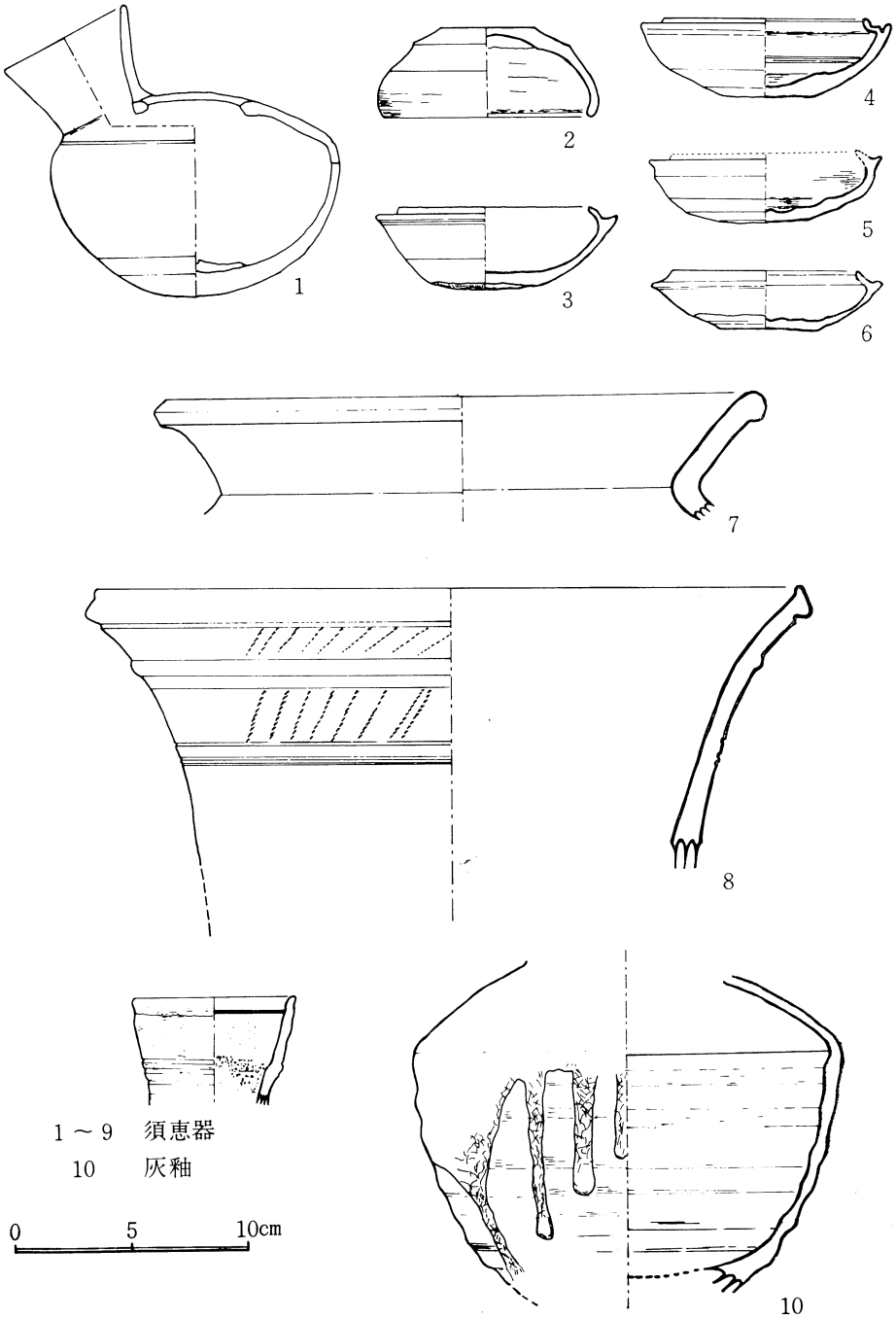
図版 8　石 室 展 開 図



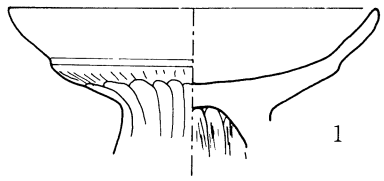
図版 9　石室横断図及び縦断図

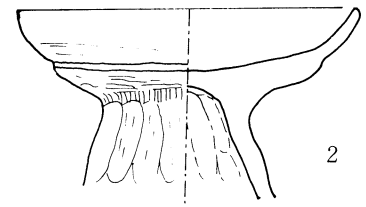


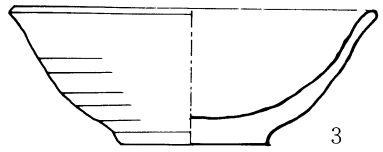
図版 10　出土遺物実測図

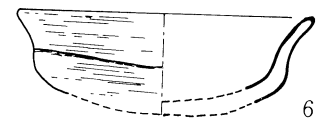


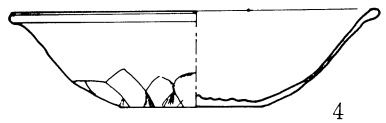
図版 11　出土遺物実測図

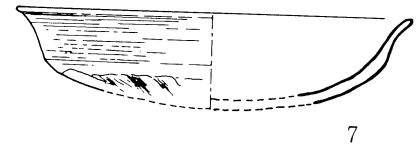


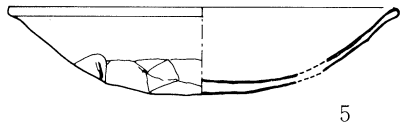


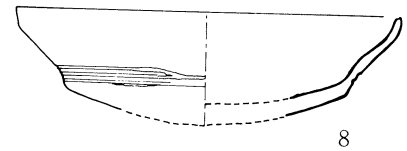


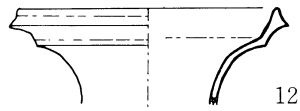


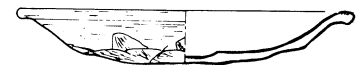


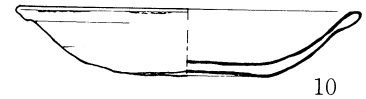




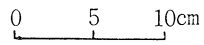






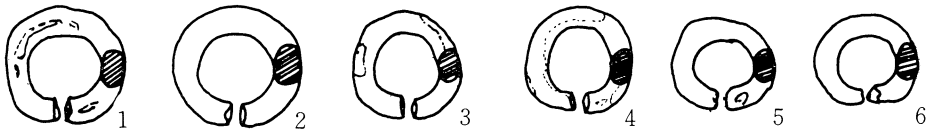


1～11　土師器
12　　灰釉

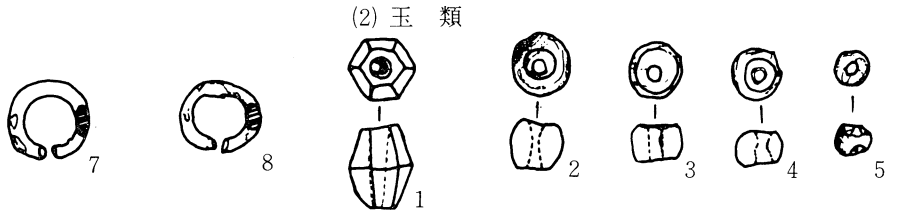


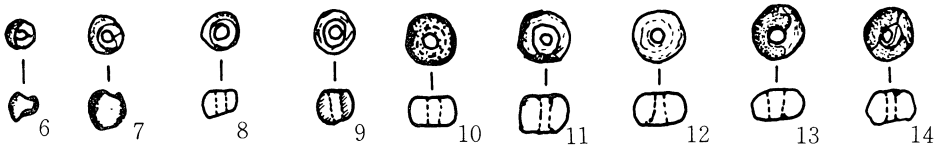
図版 12　装 身 具 実 測 図

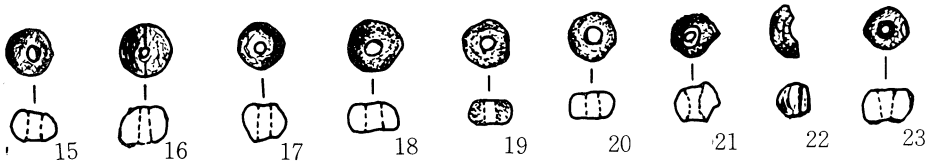
(1) 金 環

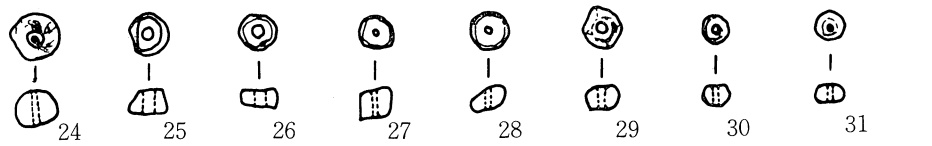


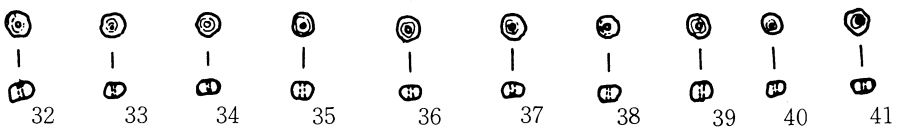
(2) 玉 類

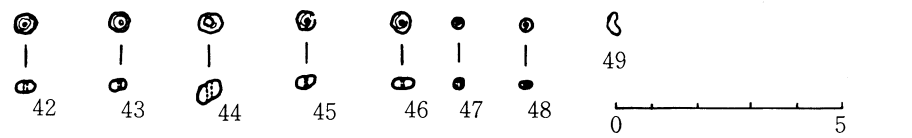












国分築地一号墳

一宮町群集墳の発掘調査報告書

印　刷　昭和 49 年 3 月 日
発　行　昭和 49 年 3 月 日

発　行　山梨県教育委員会
編　集　山梨県遺跡調査団
甲府市丸の内一丁目6番1号

印　刷　温故堂印刷株式会社
甲府市相生一丁目7番16号